

掛錫を許された雲水は、知客寮から聖侍寮へ送られる。聖侍とは禪堂の中に祭つた文殊大士（堂内では之を聖僧といふ）に事ふる侍者の義で、禪堂の出入を司る喧しい役位の僧である。此の聖侍の案内で、今度は禪堂に送られるのだが、此の時は本威儀として、正式の法衣に袈裟をかけ、白足袋を穿いて出掛ける。禪堂は文殊大士の後の入口から入つて、入つた時、聖侍は聲高らかに「新到參堂」と呼ぶるのである。どんな坊主が来たかと、堂内の僧がちろくくと其の顔を眺める前を通つて、新到は先づ文殊大士の前で三拜する。三拜終つて今度は直日の前で、其の次は聖侍の前で、低頭する。直日とは、禪堂長の様なもので、之が禪堂を率ゐることになつてゐる。筆の次手に少し僧堂の役位を説明しやうなら、今迄に出た知客、聖侍、直日の外に典座といふが賄方を勤め、副司といふが會計を承はる。此等は孰も評席と唱ふる古參の僧の中から互選するので、其の堂内に於ける

權勢は頗る盛なものだ。評席とは全堂内の僧の中から、師家が三人乃至五人を抜いて、之を命するので、一寸勅選議員といふ格に當る。評席の数は必ずしも一定しないので、重大な役位も、評席の外から出ることがある。之から下つては、殿司として、讀經の世話をする者がある。隠侍として、隠寮附の侍者がある。別に知客には知隨、副司には副隨として、次官だか祕書官だかを兼ねたやうなのがある。此等は年二回、雪安居雨安居の制中の終に交代することになつてゐる。今度の直日は喧しい男だから、接心中は困るぞなどいふ蔭口は、能く聞く所である。

さて、新到が挨拶終つて後、自席に宛てられた所に著いて、兩側に列んだ雲水一同に挨拶すると、其の次に茶禮がある。聖侍ががちろくと柝を撃つを合圖に、銘々が出した茶碗に茶をついで回る。之が新舊の顔繋ぎの茶話會といふものだ。尤も茶話會と言つても、話も何もするのでない。黙り

こくつて茶をのみだけだ。

茶禮の後、知客に案内せられて、老師と相見をするので、此の時は新到の者師家の前で三拜し、師家から修行に關する垂戒がある。相見から禪堂へ歸ると、先づ荷物を解いて、夫々に仕舞ひ込む。元來禪堂は中央が土間で、土間の中央に例の文殊大士を祭つてある。土間の兩側は二三尺高くなつて、幅は疊一疊位の細長い座敷になる。之を單といふ。大抵一人を疊一疊に割り宛てる。單の後側に單函といふのがあつて、此處へ荷物を仕舞ふ。すつと上には夜具を入れる所がある。夜具といつても、夏冬共に薄い蒲團を柏餅にして寝るのだから、簡單なものだ。夜具の下に小さな棚がある。此處へは、茶碗や箸や持鉢を載せておく。

此處まで来て、彼は始めて堂内に落ちついて修行にとりかゝることとなつた。僕等門外の者が樂々と半日ほどの間に濟ませたことも、彼等には五

六日も費つて、随分嚴重な様々の儀式を経て來たのである。今時こんなむづかしい儀式が、禪僧の間に行はれてゐやうとは、殆ど偽のやうだ。併しむづかしいことを言へば、まだ追々にある。

七 參 禪

愈々大接心は始まつた。

午前二時、さながら盆を覆すが如き大雨の中に、ぐわんぐわんと大鐘が鳴り渡る。之は開靜と唱へて、殿司の僧が鳴らすので、之に引き續いてちりんちりんと巡哨の者が鈴を振つて歩く。之で山内の常住一同起き上るのである。頓て引磬の音がちんぐと聞える。禪堂で直日が堂内の僧に起床を命ずるのだと、例の「久參底」が説明して呉れた。間もなくちやんぐちやんぐとけたましく半鐘が鳴る。殿司が讀經の用意を報ずるのだとい

ふ。又間もなくうぢや〜とお經の聲が僧堂の方で聞え始める。お經がすむと、雲板が鳴る。之が朝飯ださうな。やがてばん〜と木板の音が響く。開板とて、禪堂の開けた報知だといふ。グワン〜から始まつて、チリン〜となり、チン〜となり、ヂヤン〜となり、ウヂヤ〜となり、果はバン〜となつて、夫でお仕舞かと思へば、今度はや〜方角を改めて、こん〜と喚鐘が鳴り始めた。嗚呼何すれぞ夫れ鳴物の多きやと言ひたくなる。

喚鐘が鳴ると同時に、僕等は夫と許り、雨に打たれた竹の香めでたき木の下道を通つて、隠寮に出掛けた。愈々參禪が始まるのである。見るとまだ明けやらぬ薄暗がりの玄關に、早や大分犇々と詰め掛けてゐる。孰も瞑目静坐ぶつりとも音はさせぬ。此等は喚鐘の前に陣取つて、順番にこんこんと二づゝ喚鐘を叩いて奥へ入つて行く。入つた者は隠寮の奥の奥にと

つかと坐つて控へた師家の前へ行つて、三拜して後、恭々しく見解を呈する。呈した見解に就いて師家の垂戒がすむと、師家がりん〜と鈴を振るので、之を合圖に又三拜して出て来る。玄關に控へた者は、此の鈴の音を聞いて、入れ代りに又鐘を叩いて入る。此の師家の控へた處を室内といひ、此處へ入ることを入室といふ。入室して所見を呈することを參禪といふ。世には參禪も坐禪も同じものと心得た人がないでもないから、此に念の爲に一言を添へておく。參禪とは入室すること、坐禪とは坐ることである。室内では師家と二人切の差向ひ。四邊に誰も聞く人がないから、何を言はうとも、何をしやうとも、一切構はぬ。但禪門の内規、室内では何をしてもよいが、外へ出ては、一切室内の消息を洩してはいけぬことになつてゐる。之はいろんなことを聞くと、修行の邪魔になるといふのださうな。併し參禪中の珍談は、多く此の室内から出て来る。

やがて順番が来て、僕は喚鐘を叩いて入った。ちと意氣地のない話だが、此の鐘を鳴らすだけのことも、腹が据らぬと中々こん／＼と調子よく行かぬ。況や、之から奥へ入る迄の長廊下を行く足取、又入つて後、せかす慌てず三拜を行ふ態度など、何でもない様で、實は大に何でもある。人を見慣れた禪宗坊主の眼に、之が分らずにすむものでない。だから鐘の叩き具合、廊下を歩く足音、乃至三拜の仕方だけで、此奴胡散と悟られて、未だ一語を發せぬ前に、りん／＼と例の鈴で追ひ遣られて了ふことが屢々あると聞く。今考へると、僕の三拜などは、腰がふらついて、随分まづいものであつた。

三拜終つて和尚の前へ坐ると、和尚は簡單に禪宗の性質を説明した後、白隠和尚の「雙手相拍つて聲あり、隻手還つて何の聲かある。」といふ公案を授けられた。此の次の參禪からは、此の公案に就いて僕の見解を呈する

といふ譯である。僕は又腰のふらついたまづい三拜をして、此處を出た。いつしか、夜はほの／＼と明けてゐる。

八 坐 禪

其の頃丁度、僕は學校でブライデルの宗教哲學の講義を聽いてゐたので、神とか、宇宙とか、絶對とか、無限とかいふ言葉は人竝以上ちやんと心得てゐる積であつた。だから「隻手の聲」なんどいふ謎の様な公案を貰つても、一向驚かぬ。態々坐禪して考へて見る迄もないことゝ思つた。

隱寮から此の續燈菴に歸つて、神妙に線香を炷いて、一寸坐禪をして見たが、足は痛むし、蚤は食ふし、物の十分と我慢は出來ない。其の中講座の鐘が鳴つて、毒語心經の提唱が始まつたので、之を聽きに僧堂へ出かけた。歸つても一廉分つた積の僕は、一向坐禪などしなかつた。晝過になつ

て、又こん／＼と喚鐘が鳴つたので早速隠察へ駆けつけて、「既に是れ絶對、之を有といふも對を絶せず、無といはんも亦對を絶せず、非有といふも當らず、非無といふも亦得ず、即ち是れ隻手の聲。」とか何とか、今思ひ出しても、冷汗の出る様なことを得意氣に滔々とまくし立てた。すると、和尚は例のぎよろりとした目で、冷かに僕の顔を見ながら、「そんなことなら皆書物に書いてある。書物の稽古なら、強ひてこんな處へ來なくても、幾何も世間に學校といふものがあるでなア」と來た。

僕はぎやふんと參つた。成程世間に「學校といふもの」がある様な氣もする。和尚は旨いことを言ふ哩と思ふやうな氣もする。兎に角、此奴は一寸拳骨で西瓜の鑑定をするやうな譯には行かぬと悟つて、又線香を炷いて、今度は本氣に續燈の本堂で坐つた。

其の中日暮方になつて、禪堂に出掛けた。堂に入ると、兩側の單には、

僧俗卅餘人、孰も苦蟲を噛み潰した様な顔をして坐つてゐる。僕等は聖侍の前で一才低頭して、單の上に登つた。暫く坐つてゐると、直日が鳴らす引磬を合圖に、足を投げ出すもある。單から下りて出て行くのもあつた。之が禪堂内の休憩時間で、之が二分も経つと、又引磬が鳴つて一同元の坐に復して、又鳴を静めて坐つた。坐ると間もなく、隠察の方でこん／＼と喚鐘が鳴る。聖侍が胸間聲で、「直日單より總參」と呼ばふつた。接心一週日の初中終の三日には、總參とて、禪堂にある者一人も残らず、參禪しなければならぬ時がある。(總參に對して通常の參禪を獨參といふ。)此の總參には直日の側から順々に行く時と、其の反對の側の者が先づ行く時と、二色ある。「直日單より」とは之だ。外の時は「單頭端」よりといふ。

喚鐘の音で僕は實にぎよつとした。僕は入室したとて、丸で言ふことはないが、總參とあらば、是が非でも行かなければならぬ。乃ち悄然とし

て出掛けた。凡そ禪僧の最もつらいのは、此の總參にある。參禪しても言ふことがない、生半可なことを言へば、叱られる、怒なりつけられる、悪くすると擲られる。さりとて行くまいとすれば、直日が催促に来る、夫でも動かぬと、手を取つて引きずり出される。双方負けぬ氣同志の坊主になると、行け行かぬで、到頭取組合を始めることさへある。意氣地のない奴になると泣き出すことがある。

僕は不得要領な總參を了つて後、又禪堂に歸つて坐つた。坐禪中は、直日を首として、雲水が交るゝ警策肩に、單に沿つて始終土間を巡邏してゐる。居住ひを崩した者、坐りながら睡に落ちた者、蚊が食ふとて兩手を袴の下に入れた者などがあると、軽く警策の端で突つて注意する。又坐りながら睡氣がさすか、肩の張つた者は丁度自分の前へ來た時合掌すると、巡邏の僧は立ち留つて、警策を平に兩手に載せて、低頭した後、相手の男

を屈ませておいて、其の肩をぼん／＼と叩いてやる。叩いて了へば、雙方互に低頭し合掌し合つて、又もや警策肩に土間を回る。下手に叩かれて、我知らず、『ア痛ッ！』など口走つて、端なく堂内の大笑ひとなることもあつた。

ちん／＼と引磬が鳴つた。直日が『經行』と呼ばるつた。一同は單から下りて、土間の中をぐる／＼と歩き回つた。之は動中の工夫を凝らす爲とかで、坐禪中足の草臥れた頃に、時々やる。昔はお經を讀みながら歩いたものだとて、斯くは「經行」と書くのだといふ。

八時頃になつて茶禮がある。聖侍が茶を汲んで回る。夫から駄菓子をつ三つ宛一同に取らせる。一心不亂に坐り込んで、心身共に疲勞した折のこととて、此の時の茶ほど世の中に旨いものはない。茶禮終つてから、參禪があつて九時に解定となる。解定の鐘が鳴ると共に、一同解散して、禪

堂は閉ぢられるのである。

僕等は又雨を冒して、續燈菴に歸つた。

今朝からの坐禪で、世間には學校といふものゝあることだけ悟つたのである。

九 僧堂の一日

或日「久參底」の者から、僧堂の飯を食ひに行かぬかと誘はれた。

僧堂では、朝十時頃に晝飯が出る。晝飯は齋座と唱へて、一日中一番御馳走のある時だといふ。此の日頃芋や茄子許で大分痛め付けられて居た折のことゝて、御馳走と聞いては我慢がならぬ。早速僧堂に出掛けた。やゝ暫く待つて居ると、先づ雲板とて磬の様なものが鳴つて、始めて飯臺の用意が出来た。間もなく二度目の雲板が鳴つて、堂内の僧一同飯臺の前に居

列んだので、僕等も恐るゝ其の片端に著いた。例の通り黙りこくつて、誰一人口を利く者が無い。靜なること太古の如しだ。やがて一同が般若心經だか、十佛名經だかを讀み始めた。之がすむと、又五觀の偈といふのを讀む。「一つには何やらして、二つには斯やらして、三つには何とやら、四つには正に良藥を事とするは形枯を療せんが爲なり、五つには道業を成せんが爲に應に此の食を受くべし」と讀み終つて、ちやきッ！と柏子木を一つ打つて、初めて飯となつた。給仕番の僧が出て、一々給仕して呉れる。其の間一同寂然として、達摩大師は坐禪の體とある。

長いお經に麻痺を切らせた僕は、逸早く飯をかき込まうとすると、「久參底」が注意して、箸の端で飯を少し飯臺へ翻せといふ。之は生飯とか餓鬼飯とか言つて、無縁の衆生に施すものださうな。之が濟んで、愈々本藝を取り立てゝ御覽に入れやうとすると、又しても「久參底」が注意して、そ

んなにぐちやぐちと大きな音をさせてはいけぬといふ。見ると、成程一同は堅く口を結んだ儘、ぶつりとも言はずに食つてゐる。いやはや窮屈なことだ。

然り而して、其の所謂御馳走とはいふと、麥八分の眞黒な飯に、ご味噌汁といふまづげな汁があるきり、殆ど咽喉を通りさうにない。僧堂で折節供養があつて、米の飯でも出ることがあると、之を白的と唱へて、何よりの御馳走としてある位で、其の外はすべて八分の麥的である。晝が之なら、朝夕は思ひやられる。朝飯は粥座といつて、殆ど水許りの麥の粥に萬年漬が出る切り。萬年漬とは、菜葉の鹽漬で、夫も新しいのは決して食はぬ。古くて臭くて、ぼろ／＼になつた奴に限るから、之を禪語(?)で萬年漬と唱へてゐる。夕飯は大抵四時頃に食ふ。印度傳來の佛法の制では、午後には飯を食ふことがならぬといふので、特に夕飯は藥石と唱へてゐる。之は晝の

麥的を雜炊か粥にして食ふのである。斯なまづいものを食つても、人間は達者に生きて居れるのだ。僕は今迄贅澤を言つたのが勿體なくなつた。

併し禪僧の苦は唯食事許りではない。朝は二時か三時に起されて、小さな竹柄杓一杯の水で、口を嗽ぎ顔を洗ひ、夫から夜の九時迄は、接心中なら、食事と讀經の外、ぶつ通しの坐禪のし續けである。其の間に四度の參禪があつて、叱られもすれば小言も食ふ。接心のない時は、様々の作務があつて、掃除、薪割、米搗、風呂焚、洗濯から雪隠の掃除、頭の剃り合、垢の流し合までした上、己等が食料の仕入にとて、時には綱代笠被つて托鉢に出なければならぬ。托鉢にも麥鉢、諸鉢、大根鉢など、時候々々で様々あつて、麥俵をうんとこしよと擔いで回ることもあれば、野菜鉢の時などは、法衣姿に甲斐々々しく玉棒線取つて、大八車を輓いて歩くこともある。斯くて漸く一日の仕事を終つて、疲れ切つて寢床に入つた所が、例の薄い柏

餅の蒲團だ。今時斯んな荒修行が、形式だけでも遺つてゐるのは、恐らく禪宗坊主の外にあるまい。僕は、懦弱千萬な當今の青年に、粗食惡衣を事とせず、一日作さずんば一日食はざる底の元氣を養はせんが爲、せめて半年か一年の僧堂生活をさせて見たいと、豫て思つてゐる。

やつと麥的を一杯かき込んで後、へいお代りと許り茶碗を差し出さうとすると、又「久參底」に叱られた。こんな時は茶碗を飯臺の上に置いたまま合掌して待つてゐると、給仕番が盛つて呉れるといふ。命の如く控へてゐると、給仕の僧が来て、意地悪く山と盛らうとする。はッと思つたが、口が利けぬ。「久參底」の男夫と察して、盛られて困るなら、合掌した手を急ぎ摺り合せと言ふ。之でやつと助かつた。

食事がすんで其の儘立たうとすると、又叱られた。食ひ残した物は皆食つて了つて、夫から箸と茶碗とを綺麗に茶で洗つて、其の洗つた茶は呑ん

で了ふのだといふ。夫がすむと、今度は其の茶碗を何處とやらへ片づけて來いといふ。

いや、僕は飛んでもない御馳走に預つた。

一〇 隻手三昧

夫から二三日は一心不亂と坐つた。一心不亂とは坐るが、中々一心不亂に行かぬ。ともすれば、夏のことゝて、直ぐ睡氣がさす、蚤が喰ふ、蚊が螫す、眼がしよぼ／＼になつて涙が出る、足は痺れて棒のやうになる。夫も構はずやつてゐる中に、段々肩が凝つて、果は齒齦が腫れ出して來た。

參禪も、初の程は、喚鐘の鳴る毎缺かさず出掛けて、何とか角とか理窟をつけて見たが、彼もいけず此もいけずと、一々斥けられて、今は早何とも物の言ひ様がなくなつた。屁理窟を言ふと叱られる、糟妄想だと罵られる、

時には和尚が恐ろしい眼玉を光らかして、今にも眞向から打つて掛らんす勢を示したこともある。忌々しいから、二度許り續けて和尚の前へ坐つた儘、何と問はれやうが黙り返つて一言も言はずに了つたことがある。無論叱られるのを覺悟の上であつたが、存外二度とも格別叱られなかつた。これに大に氣を得て、三度目には無言どころか、呼吸もせず控へてゐたら、今度といふ今度は、霹靂一聲、思ひ設けぬ大雷がぐわんと落ちた。「幾度も〜死人の眞似許りに來やがつて、夫が何の呪咀になる！」とやられた。夫でお仕舞かと思つたら、焉んぞ知らん、一旦落ちた雷が又ごろついで、天地も破るゝ許りの大音聲に、「隻手一本になつて來いッ」と怒鳴りつけられた。ぶッ！隻手一本になるなんて、和尚も中々御冗談者ぢやわい。

斯う小烈くやられると、立つても坐つても居られなくなる。後に聞いた

話だが、誰しも、斯ういふ時は、尋常一様の坐禪でいかぬと知つて、様々よことをして見るものだ。徹夜もする、斷食もする、數息觀をやる、大日觀とやらをやる、風呂の中へ坐り込むのもある。時には途方もない處へ籠つて、暫く全く世間と離れやうとすることもある。籠るには圓覺寺の山門、正續院の開山塔、辨天の大鐘堂や、さては山を攀ちて望岳樓の跡の草原などへ出る。甚しいのは、夜に入つて建長寺の上の半僧坊や、其の奥の夜鳴不動などへ出掛ける者もある。今九州某地の代議士になつてゐる某君などは、寒中不動の瀧を浴びて、單衣一枚でがち〜震へながら參禪したら、和尚は何と思つたか夫位の決心でなければいけぬとか何とか、えらく賞め立てた。夫を聞いて、僕の友人何某が、同じことをして、同じ風體で出掛けたところが、今度は、そんな荒行が何の役に立つかと冷かされた。人を突いたり引いたり、時と相手とに依つて、忽然として、五枚舌六枚舌を使

ひわくる禪宗坊主の老獺は、今に始まつたことでない。

人もすなることを僕もした。續燈菴の裏の、晝尙暗き樹立の中に大きな洞窟が一つある。入口は小さいが、中は廣さ六坪許り。中央に大きな石碑が立つて、其の前に四五寸の高さに石を切つた壇がある。件の石碑を禮拜する者の坐る爲に出來たものらしい。僕は或夜蒲團と拂子とを携へて、此の壇の上に坐つた。

ちつと觀念の眼を据ゑて、坐つて見ると、流石に人の氣はひも絶えた處とて、聞えるものは、唯我が血液の我が身の内を巡る音ばかり。之でこそと大に心を勵ましたが、夜が更けるに連れて、心は段々亂れて來た。世の中が靜になればなるほど、様々の妄念が浮んで、殆ど我ながら愛想の盡きるやうな下らぬこと許り考へた。夫に秋近い木の葉が時々一つ二つばさりと落ちると、其の度毎に、はつと驚いて、心動が烈しくなる。而して始終

暗がりの中で、後から何者か潜び足で窺ひ寄るやうな氣がしてならない。何でも彼でも隻手一本になる積で、幾度か隻手々々と思を凝らす中には、様々の片手が出て來た。大きな手、小さい手、毛むくちやらの手、節くれ立つた手、圓い優しい手などが出て來て、中にはダイヤ入りの指輪を嵌めた可愛い女の手まで出て來た。馬鹿など、我と我が心を叱つて掻き消さうとする、今度は瘦せほうけた蒼白い骨だらけの手が出て來て、此奴が薄氣味悪くも、僕の方へ手招きをする。——僕はぞつとして思はず、『ひやア』と聲を立てながら、飛び退かうとしたが、其の拍子にこつつりと、したゝか頭を何處へか打ち附けた。

餘りの痛さに氣がつくと、恥かしい哉、馬鹿々々しい哉、僕は何時しか居睡をして、壇から下へ轉げ落ちたのであつた。

一一 斷食接心

斷食もして見た。

斷食では大分奇談がある。重田風骨といふ僕の友人が、景福巷に籠つて二日程何も食はずに坐つてゐたが、腹の空るに連れて、丁度飯時になる毎に、色々な御馳走が眼の前にちらついて、逆も氣を落ち付けることは出来ぬ。愈々我慢がし切れなくなつて、何か食ふ物を探したが、飯も菜もない。僅に干海苔を二三枚見つけ出したが、さて二三日火の氣を絶つたこととて、焼くことが出来ない。到頭せうことなしに、洋燈を點けて其の火で海苔を炙つて食つたといふ。之は重田の海苔焼事件とて、古い人は今でも知つてゐる。

まだある。前年滿洲で戦死した陸軍中尉植村宗光君は、文學士になつて

後、髪を薙つて僧となつた位の人で、高等學校時代から随分工風に骨を折つたものだ。此の人がまだ初入の公案を透過せぬ頃に、斷食接心とて山門に籠つたことがある。全く何も食はずにゐては身體にさはるとて、堅麵麴を二十一枚用意して、一食一枚と定め、都合一週間籠る積であつた。所が籠つた第一日の日に一枚食つて見たが、逆も足りない。其處で、食ふ分量さへ同じなら、二十一度に分けて食ふのも、一度に食ふのも同じだとして、べろりと一度に平らげて了つた。そして三日何も食はずに坐つた。すると、坐つた儘で腰が利かなくなつて、到頭四日目とかに、人に助けられて、山門から下りて來た。此の事を何時も語り出して、大笑ひをしたが、嗚呼彼も中道にして滿洲の露と消えた。

僕等はまだ馬鹿なことをやつた。蚊接心と唱へて、夜中暗がりの中に、赤裸で坐つたのである。線香を真中に立て、之を取り圍んで、四人程で

坐つて見たが、血に渴した山の中の藪蚊が、容赦なく喰ひつくので、痛いの痛くないのと言ふ様な段ぢやない。一分も我慢する中に、身體一面に焼けつくやうになつて、氣が違ひさうになつてくる。我慢の弱い僕は、一番に聲を上げて逃げ出した。蚊に喰はれて最も苦しい所は唇であること、此の時始めて悟つた。神経が鋭敏な上に、搔くことも、つねることも出来ないからである。

蚊の次手に、蚤で可笑しいことがある。或日獨りで坐つてゐると、變に足の裏がむづ痒い。蚤だと思つたが、折角静まりかけた身を、今動かすのは残念と思つて、我慢してゐると、此の蚤能くく向上心に富んだ奴と覺えて、足の裏では満足せず、段々腓部から股の方へ上り初めた。くすぐつたいのを忍んでゐると、下腹から胸の方へ出て、到頭襟まで來た。襟を出て外へ飛び出すかと思つたら、今度は僕の頤を傳つて、頬から額へか

けて、僕の顔を縦断して頭の髪の毛の中へもぐり込んだ。蚤にも随分喰はれたが、斯んな大旅行家は珍しい。之が人間なら儘にシャツクルトンやベアリイ以上だ、——尤も斯う蚤の世話を焼いてゐる中は、無論隻手も何もあつた。

一則の公案にだに、猶且斯の如く苦しむのである。之が透つて、夫で一切萬事終了するものかと思つたら、其の外に次から次へと、千六百九十九則あるといふ。此の千七百則盡く透過したのを、大事了畢と唱へて、初めて此に誰某の法嗣と認められる。師家となつて、一道場を率ゐて、他の參禪を聞くのは、所謂大事了畢後でなければならぬ。生半可な坊主が道場を開いてどもゐやうものなら、何時何處から、どえらい智識が問答に飛び込んで來て、道場破りをせぬとも限らぬ。前瑞巖の南天棒などは道場破りで名高いものであつた。道場を破ると、破つた者が其處の喚鐘を引つ捉つて

行く。今の圓覺僧堂の喚鐘も、和尚が何處やらから引つ提つて來たのだといふ話だ。

だから和尚はえらい、といふことになる。禪門の僧俗が師家に對してびりつのは、之あるが爲である。今の日本で恐らく誠の師弟の關係らしいもの、禪門に於けるが如きは餘りあるまい。

嗚呼千七百則の千七百分の一も濟さぬ内に、接心の日はどん／＼經つて行つた。

二 現境

色々と下らぬ眞似をしてゐる中に、大分定力がついて來た。捻つては、野狐仲間て之を境涯が宜くなつたといふ。公案を拈提して、ひたぶる坐つてゐると、やゝ純一無雜の境に近い處へ入ることが出來て來た。身はびり

びり動きもせず、ちツとして、心は隻手許りを念ずることゝて、眼にも耳にも、客觀的には音響や光線を受けやうが、夫がさながら硝子に物の寫つた様に少しも心に止つて居らぬ。身を動かさぬから、身の外に物あるか否かは覺えぬ。此に於てか、我が身は有れども無きが如く、見れども見ず、聞けども聞かず、空々漠々瓦斯の如く、エーテルの如くになつて了ふ。つまり一種の自己催眠の状態に陥つたので、禪宗では、之を現境と言つてゐる。之を見性成佛の期至れるものと心得て、大得意で參禪して、手殿しく叱りつけられたのは恐らく僕許りであるまい。

之が嵩じると、時々えらい幻視に陥る。例へば、身は廓落たる太虛空の中に下つて、頭に物を頂かず、足に地を踏まず、宇宙の眞中央に、唯一人放り出された様になることがある。又身は浮べる雲のたゞよふ如く、飄乎として何處を目的ともなく、無限の空間を駆け行くと見ることもある。

又時としては、身は東西南北黒闇々たる中を、金輪奈落の際迄もと、下へ下へ落ち行くとも見る。又脚底はひたと大地に膠著し、頭は億萬貫の大盤石に支へられて、手も出でず、足も動けずといふやうになることもある。偶々參禪に出で、斯なことを白狀すれば、皆是れ魔境だとして、一も二もなく斥けられた。

其の中下腹が段々せり出して來た。どツかりと結伽趺坐して、氣海丹田に力を入れると、自然に調子の揃つた腹式呼吸が出来るので、之が胃腸の消化吸収を助けて、坐禪中は腹の空ること非常である。僕は今でも腹に物の溜つた時、三十分も坐禪をやると、必ず請け合つて治る。之が日數經るに連れて、白隱和尚の所謂「臍下瓠然たること未だ篠打せざる鞞」の如くなつて來る。

僕は腹の膨れた外に、格別何の悟つた所もない内、七日の接心は事なく

終つた。翌日は把針灸治と唱へて、道場一同總休息とあるので、僕等も其の日は名を精進あげに藉りて、八幡前まで魚を食ひに行つたことを記えて居る。

嗚呼十有餘年の月日流るゝが如く過ぎて、今年此の續燈菴に來て見れば、橙は青うなつて木に残つてゐるが、和尚は大分年を取られた。歸途に壽徳菴に寄つて見ると、流石に此處の和尚は、昔に變らぬ大の元氣で、砂糖水を急須に入れて、茶の代りだとして注いで出し、人の顔をちろ／＼と見ながら、「お前も段々墮落したのう」と仰せらる。和尚の墮落呼ば／＼も久しいものだ。當年我等の俱樂部なりける景福菴はと見やれば、近頃家ぐるみ小坪とやらに移されて、跡には小やかな菴が立つてゐる。此處で起臥を共にした人々の中には、大分鬼籍に入つた者もある。僕は悵然として言ひ知らぬ感に打たれて、圓覺寺を辭した。

二本の警策は無事に持ち歸つて、頼まれもせぬに、大分いゝんな人を擲つてやつた。肝腎の母に對しては、幾度か之を背にあてゝ見たが、今に至るまで、何うしても打ち下す氣にならぬ。(明治四十二年九月)

虎豹之文來田、猿狙之便執蓋之狗來藉——莊子

不流行兒放語

一

十七世紀の頃英國の宮女の間にて、パッチといふものゝ流行せることあり。パッチとは絹の小片を顔や頸筋に貼りつけて、女振を能く見せんと企なり。初は黒色の絹を用ひ、之を三日月や、星や、輪や、十字や、ダイヤや、ハートの形に切りて用ひしが、後には絹も面白からずとて、プラスチックを用ひ、形も四頭立の馬車や、帆掛舟や、お城の形などに切り取りたるが流行れり。馬鹿々々しなどいはんも愚なり。

二

斯る馬鹿々々しきものを顔につけて、女振がよくなるものと心得たる女共も随分愚の至なれど、此の又パッチの流行し來れるそもくの起原を

聞くに及んでは、殆ど開いた口の塞がらざるものあり。パチの起原といふは名は忘れたれど、何がしの夫人といふが、顔に痣だか黒子だかありて醜かりしを蔽はんとて、絹の小片をパッチと其の上に貼りつけしより、是れ妙なりと、世の中の女共が真似たるなりとぞ聞えし。

三

スペインサーなりしと覺ゆ、流行とは種族の間の競争より起れるなりと説きたり。されば、強き種族が弱き種族の流行を左右せるは、史上に隠れもなき事實なり。

英國上古の民たりしブリトン人は、野蠻人にふさはしき獸皮の衣を著けたり。英國が羅馬の征服を受くるに及びて、忽ち寛濶なるトーガ風の衣流行し出したり。其の後デーンズ人サクソン人などの征服を受けて、流石に北國式の衣裳流行し、シャツなどいふものも、此の頃より用ひられ初めぬ。

夫がノルマン征服の頃に至りて、羅典風の装又もや流行の勢を盛り返しよは、人の知るところなるべし。

四

女の夜會服に胸も露はなるを著くるは、恐らく羅馬より來れるなるべし。羅馬の如き熱き國ならば、之にても宜けれども、北獨逸や、英吉利や、露西亞邊まで、之でやつて行かうといふは、理窟のなき話なり。夫も暖室の設備十分なる歐羅巴亞米利加などならばこそあれ、障子の隙洩る風いとど冷たき日本にまで、之を見んとは目出たきことの限なり。

男の衣裳は羅馬式より大分變れり。女の衣裳に至つては、依然として羅馬式の形を存す。總じて女は男よりも愚なるものと見えたり。

五

流行といふは愚なものながら、流行の變遷といふは、多くの場合に於て、

一面の進歩を意味せり。左れば一も二も新流行を追ひて得々たるも、まぎの至なれど、さりとして全く之を追はざらんも、野暮と知れ。

今より十餘年前、洋服の短褌は無暗に胸の明いたるものなりき。之が四五年前に至りて、無暗に襟の詰りたるものとなりしが、今日は又之が少し開き始めて、前二者の中を行くこととなりたり。いはゞ是れヘーゲルの哲學のシンセシスといふ所なり、進歩なり。

流行も何も構はずとて、今日胸の滅法界開いた短褌を着て銀座通を闊歩する者あらば、少くとも山崎の親爺に笑はるべし。山崎の親爺に笑はるゝことを名譽と心得たる輩に限りて、そんな風をして歩くべし。

六

フロックコートの中の腰の處にある二個の鈕は、中世の騎士などが、劔を佩びたる時に用ひたる釣革の遺物なり。佩劔の用なき今日に在りて

は、丸で無用の圓物なり。さりとしてこんな無用の物は附くるに及ばずとて、棄てて了ふ譯にも行かず。流行の恐るべき所以ならざらんや。

七

昨年桑港に遊べる時、同地の商品陳列館長アイリツシユ大佐といふに會ひしに、彼はシャツの上に襟飾も附けずして、大手を振つて出で来れり。聞けば、彼は如何なる席にも、襟飾を着けぬ大將なりとぞ。夫れ襟飾とは、カラ留の鈕を隠す爲に附くるものなり。カラを着けながら襟飾を着けぬは、頭隠して尻を隠さぬ類なり。僕は、大佐の流行に與せざるに與すること能はず。

八

カラあり。此にカラ留の鈕あり。此の鈕を隠さんが爲とて此に襟飾あり。此の又襟飾を恰好よく見せんとて、此にタイピンあり。所が此のピン

をうツかり拘摸にでもやられては困るといふので、此に近頃ピン、ガードといふもの出来たり。此の次には此のガードをスタッドにでも流用すべき工夫出るかも知るべからず、或は既にそんな工夫が出来て居るかも知れず。流行とは、必要と装飾との間に出来たる私生兒なりと心得べし。

九

流行とは、強き者の真似なり。故に流行を追ふといふは、弱き者の自覺なり。かるが故に、流行を追ふは、時として謙遜の意を表することとなるべし。

僕の此の篇は、此の最後の意味に依りて成る。(明治四十二年十月)

非忠君非愛國主義

標題を一目見た許りで魂消ること勿れ。忠君を非とし、愛國を非とする主義と解してこそ、兎角の非難はあれ、之を「忠君に非ずんば愛國に非ざる主義」と讀まんに、何の妨ぐる所ぞや。若し又之を「忠君は愛國に非ざる主義を非とす」とも讀まば、愈々以てわが意を得たり。眞言亡國律國賊、念佛無間禪天魔も、讀みやう一つにて、「言を眞にすれば、國に國賊を律するなく、念佛間なければ、天魔を禪む」とも解すべし。故に曰ふ、標題を一目見た許りで、魂消ること勿れと。解せりや。

一
倫敦の南ケンジントン博物館の中に、何十丈といふ高所より、長さ一條

の綱を釣り下げ、其の端に鐵丸一箇をくくりつけたるがあり。件の鐵丸は、器械の力を假るにも非ず、又風に吹き揺らるゝといふにも非ずして、唯地球の自動せる震動によりて間斷なく一定の距離を、一定の方向に、振子の如く運動し居るなり。

僕は之を見て初めて、成程地球は動いてゐるものぢや哩と合點が行けり。地球の動いてゐる位のこととは、學校でも習ひ、書物でも讀んで、疾くより承知してゐたることながら、夫は唯太陽の東から出て西に入るが如きを見て、無理厄體に合點せしめられゐたるに過ぎず。僕が實地に其の動いてゐる所を目撃したるは、此の博物館の振子に始まる。

二

天王星の初めて發見せられたる時、其の傾斜の具合とか何とかど、何うしても、其の頃迄に知れ居たる太陽系統の諸惑星の引力に由るとのみにて

は、解し難き所ありき。是れ必定此の外に別に人の知らざる惑星の、太陽系統中に存するが故なるべしと、説く者起りて、其の結果、遂に前世紀に至りて、海王星なるものを發見したり。

今の學者は何と説いてゐるか知らねど、僕等が中學に居た頃は、儘に右の如く教へて貰ひたり。僕等が斯く教はりたる時、天文學者などいふ者は、何千萬億里の先の事とも知れぬ星の、傾射が何うの、引力が何うのと、さて餘計な心配をした者かなと、腹の中で笑ひ居たり。然るに、其の後六七年たつて、エマソンの論集を讀みしに、其の何かの論文の中に、

『汝が今現に讀める所の書物を、唯太陽の光のみに依りて讀み居るものと解すること勿れ。實に、太陽の光も汝が書物の上に落ち來るべし。されども、之と同時に、幾億兆哩を隔てたる星の光も、亦其の上に落ち來ることなきを保せんや』

といふが如き意味の文言あるを見たり。此の文言に依りて、僕は天王星、海王星などの光が、近くひたくと僕の机の上迄来て居ることを悟れり。是より本文に入る。

三

凡そ世に愛國といふこと程、手がよりのつき悪きものはなし。國を愛せよとの教は、屢々承つて、屢々心得たりと雖も、一體何うするのが國を愛するといふことになるものかと問へば、戦争でも始まらねば、何として見やうもなきものゝ如し。犬猫の類ならばこそあれ、頭を撫でよやる譯に行かず、抱いて頬ずりをせんやうもなし。可愛がるに可愛がりやうの分らぬものは、誠に國なり。

四

元來、愛國とは愛國の精神とて、精神の一種なり。愛國などいふ動詞の

やうな名詞を用ふるが故に、何だかたばたして見ねば、氣の済まぬ様な心地がすれども、實は己の生れたる家は懐しく、わが故郷は戀しいといふと同じく、言はゞ心の向けやうの一なり。手足の運動には非ず。されば國を忘れぬといふ迄にて、愛國の方は事足れり。國を忘れざらん以上、誰かは之を愛せずといはん。唯此の愛國の情は、忠君の念に依つて、始めて生命を享け活動を生じ來るのみ。少くとも、今の日本に於ては、靜的なる愛國は、動的なる忠君に依つて始終涵養せらる。忠君といふは、生きた人を前に置いての話なり。天王星海王星の光を机の上まで持ち來れるに似たらすや。

五

所で、其の忠君といふことが、亦むづかし。九重雲深き處におはす一天萬乗の君と、草深き埴生の小屋の匹夫とは、

餘りにかけ隔たり過ぎたり。其の間に忠君の念などいふ心理の關係がありといふさへ、猶賤の女の雲上人を戀へるに似て、畏れ多きに過ぎたるに似たり。忠君の念に、或る暖味を保たしめんには、聊か距離の遠きに失せざるかぶ疑はる。

此に於て天長節といふものあり。天長の佳節は慥に君臣の間を近づけしむる機會の一たるべし。

六

僕が最も皇室と近づきたるは、昨年ベルリンの春、伯林に於て久邇宮殿下と問答したる折なりき。問答と言はんは不倫に似たれど、僕は慥に殿下の御間に應じて、様々の事をお答へ申し上げたるなり。

崇敬の念は遠ざかるより起るに非ずして、寧ろ近づくより起るものなることを、僕は特に深く此の時に於て感じたなり。殿下は、慥に僕に現り地球

の動ける様を見せ玉ひしなり。

七

國を愛せんとすれば、其處みづかに自ら「國家の干城」と唱へて、愛國は己等が一手販賣の如く心得たる者あり。君に忠ならんとすれば、其處に「皇室の藩屏」とやら何とやら、容易に人を近づけまじとて、築き上げたる石垣のやうなものあり。

一切の人民が盡く國家の干城にして、一切の人民が残らず皇室の藩屏なることを悟らしめよ。(明治四十二年十一月三日)

年頭毒語

一

某の年某の處へ、某々の人々を、僕が引き連れ行きたることありと假定せよ。其の大勢の人々の中にて、最も僕及僕等一同をへこませたる者は、基督教の信者と學校の先生となりき。

二

成程、彼等は餘り無駄口も利かず、惡いたづらもせず、其の多くは煙草も太して喫はず、酒も大抵は禁じて飲まず、飲めばとて酔ひしれる程には及ばず、如何はしき女などには、元より以て近づかんやうなし。日曜日には教會の説教にも出て行けば、聞く人ありと見る毎に、鹿爪らしく神ぢや道德ぢやと申す。一寸見た所は、如何さま殊勝氣に取られたり。

所が――

三

所が彼等は斯く自ら獨り慎むことのみを知りて、絶えて他人の身を思ひやることを知らず。吝嗇にして、狹量にして、自分さへよければ人の事などは一切構はず、己許りが品行方正なる紳士淑女であるかの如き顔をして、高く留つて人を見くびり、他と折れ合ふことを知らず、人に氣を兼ねることを心得ず、二言目には、しやくり出で、兎せよ角せよと、求めらるゝ限りは、求めずんば已まざらんとす。此に於てか人皆指彈して曰ふ、彼奴はヤソ、彼奴は教育屋、彼奴は情愛のない金吉の徒と。

四

一體酒を飲まぬとか、金の締りがよいとか、女に近づかぬとかいふこと

は、偽善者の利器也。僕なんども此の利器に依りて從來屢々奇効を奏したり。奏せられたる世間こそ、よい面の皮なりけらし。

斯の如き獨善主義の道德のみに依りて人間の價を判断せんことは、事既に古りたり。是あるは是なきに勝れりとは、僕も信ずれども、唯是のみにては何うも斯うもなるものならんや。英吉利のジェントルマンといふものは是よりも今少し餘計なことを心得たりとおぼし。少くも、彼等の道德は、個人的たると同時に、社會的たらんことを期せるに似たり。然らずや。

五

僕をして、某の國の某の役所に勤務したることありと、先づ假定せしめよ。

其の役所には、僕の上に二人の同僚ありき。其の一人を某甲といひき。熱心なる基督教の信者にして、曾て酒色を近づけず、勤勉にして小金を貯

へ、妻を愛し子を慈みて、一たびも醜聲の外に洩れたるを聞かず。而も、彼は大のケチンポにして、大の意地悪にして、大のムカ腹立の名人にして、其の上、上官には胡麻をすり、下僚にはつらく當りしが爲め、彼れの同僚も下僚も、一人として彼をよく言ふ者はなかりき。彼れの召使の男女にして、三月と續きたるは希なりきといふ。

之にても世間では、神を恐るゝ敬虔なる基督教徒として通用したる也。

六

今一人を某乙君と言ひき。彼はノンダクレにして、女好きにして、金使ひ荒く、仕事にはノラクラしたる者なりき。然りけれども、彼は上官に従順に、同僚に愛想よく、下様の者に思ひやりの情深かりければ、彼れの召使共は、彼れの爲ならば、水火も辭せずと忠勤を抽んでたり。

僕は此の兩人と日夕机を列べて、事を取ること兩三年にして、つくづく

と僕が學校で習ひ來りたる所のものゝ、甚だ頼み少きを感じたり。

七

伊藤公國葬の日、彼を主題として修身講話を演ずべしとの訓令、全國の各學校に下りし時、藤公は是れ酒色の奴、如何か之を修身講話の主題となし得べけんやと嘆ずる者、澤なりしを聞けり。

中學あたりの教師などいふ輩は、人間の道徳を、酒色と遠きか近きかに依つてのみ定まるものと心得たる也。こんな心得で居るが故に、彼等は中學の教師位よりは勤まらぬ也。屹度叱り置く。

八

世には、敵國の民を愛することを知りて、自家の僕婢を愛することを知らざる赤十字社員あり。國を愛するといふことを標榜しておきながら、良人をも愛し得ず、兒女をも愛し得ざる愛國婦人會員あり。

此の時豈に友を賣る所の禁酒家、人を陥るゝ所の「謹直家」、賄賂を取る所の宗教家あるを怪まんや。流石にアメリカのエマソン老人は旨いことを申されたり。曰く、人若し余に向つて奴隷廢止などを説き來らば、われ且つ之に向つて答へて曰はんとす、何千哩かさきの黒奴の世話など焼かんより、請ふ宅の子供の面倒でも見てやれと。

九

酒を飲むが善いか、飲まぬが善いかと問はぶ、無論飲まぬ方が善し。女を近づくる方が善いか、近づけぬ方が善いかと尋ぬる者あらば、僕と雖も如何か近づけざるを可とせざらん。唯斯うした奴には、屢々喰はせ者のあるのが、頗る僕の小癩にさはるなり。

『あの人はお堅い』と言はるゝやうな奴に限つて、大抵は融通の利かぬ、滋味の抜けぬ、灰汁の取れぬ、男にも女にももてさうにはなき連中なり。

是れ僕の癩にさはる所以の一なり。

一〇

夫れ堅いといはるゝことほど、然かく容易に俗人原の信用を博し得べきはなし。此の如き俗人原の信用を博しおいて、其の信用の蔭に隠れて、狐鼠狐鼠と士君子にあるまじき振舞をなす者亦甚多し。品行の方正を以て偽善者の利器と認むる、僕の意は此に在り。是れ僕の癩にさはる所以の二なり。

斯く僕の癩にはさはると雖も、存外人の癩にはさはらざらんも知るべからず。是れ僕の癩と人の癩と、癩の性質を異にすればなり。

一一

記得す、明治二十八年臘月、僕菊池長風を廣島監獄に訪ひて、歸途汽車にて播磨を過れることあり。明石驛より若き夫婦の、今年ばかりなる赤子を

の快げに寝入りたるを連れたるが、我が車に入り來れり。男は其の子をかき抱きて、衆客のこみ合ひたる中へのさばり込み、女は其の眼を覺まさせまじとて、人々をかき分けて、其の側に座を占めたり。眼中又他人あることなし。同車の客皆閉口して思はず苦笑す。
他人の迷惑を構はざる賢夫良妻嚴父慈母此處に在り。近う寄つて御拜を遂げらるべし。

一二

僕は此等の意味を外にして、此の三五年來、僕の道徳が慥に一段の進境を見たるを確信す。 虚つけ!!

承れ、小乗の行者共よ。(明治四十三年一月)

手紙未だ等々の経過にかゝる、新佛教に
掲載せられたる文あり序文に初白を事
書にありたり、新佛教は、新刊

五
の
卷

卷の四

Be civil to all;
serviceable to many;
familiar with few;
friend to one;
enemy to none.

—Benjamin Franklin—

續驢事馬事

一 猥褻なる圖書の公許

諸君。

今夕は此處で一大演説を試みて、天晴れ諸君をあつと言はせる積でありましたが、元來「あッ」といふ音は、大きく口を開かなければ出ない。此の寒い晩に大きな口を開いて、急に冷たい空気を吸ひ込むと、諸君は必ず咽喉加多兒を起すにきまつて居ます。だから私は今晚の演説を見合はせることとしました。夫で私の演説せんとした所を、大要文に綴つて、此に加藤熊一郎君に命じて(?)朗讀いたさせます。

私は斯ういふことを言ふ積であつたのです。近頃猥褻な圖書書籍といふものが盛に流行する。書物でいふと、所謂自然派とかの書いた小説類、圖

畫でいふと、滑稽何々といふ雑誌に出て来る奇怪千萬な圖畫——斯ういふのが盛にはやる。はやるなら飽くまでもはやらせて、春畫でも笑ひ本でも何でも、いつそのこと思ひ切つて盡く公許して見たら、何うだらうかといふのであります。

一體猥褻の圖畫といふのは、世界至る所に在る。世界至る所に要求されて居る。而して世界至る所に公には禁じられて居る。世界至る所に要求されて居るものを、公に禁じておくから、世人は益々見たがる。見たがつても禁じられて居るから、其處で非常に巧妙な、禁に觸れぬやうに出來たものが出て来て、之が劣情を挑發し、風俗を壞亂すること、法律で禁じたる猥褻の圖畫よりも、尙一層甚しくなるのであります。

無分別な若い男女が相愛して、上せ上つて居る所へ親父が水を入れる。之を日本語で「生木を裂く」と申します。生木を裂かれた男女は、ヤケを

起して驅落をするか情死をする。いつそ初から棄てておけば、此の取り上せた兩個の男女は、いつしか目がさめて来て、無事に夫婦の關係を續けるか、又は双方納得の上で分れるものであります。猥褻の書畫を禁ずるのも、畢竟生木を裂くやうなものでないかと、私は思ふのであります。

今の自然派の小説や、滑稽雜誌式の圖畫は、其の劣情を挑發すること、春畫よりも甚しい。春畫などいふものは餘りに露骨で、餘りに動物的であつて、馬鹿臭くて長く見て居れるものでない。之を公許するとなると、巧妙な劣情挑發的の圖畫の發達は、必ず妨げられるにきまつて居ります。菓子屋で小僧を雇ひ入れると、先づ盛に菓子を喰はせる。さうすると、遂には之に飽きて、自然につまみ喰の癖がなくなるといふ。私が白耳義の或る寄席に行った時、脛を出した女が出て來ると、見物がきやツ／＼言つて騒ぐ。又巴里の寄席で全身タイトを著て、殆ど丸で裸體としか見えぬ女が出

て来るのを見ました。こんなのが二人出ないと、寄席が流行らぬさうです。女が肩をぬいだり脛を出すことの、格別珍しくない日本から来て見ると、格別面白いことでも何でもないやうですが、先方では平常そんなことが珍しいから、夫で、こんなつまらぬことを喜ぶのだなど、私は考へました。隠すと見たくなり、止められるとやつて見たくなるのは人の情で、禁じて禁じ盡し得ざることを禁せんとするのは、徒に他の方面に、夫よりも一層有害有毒なる發達をさせるものであります。日本に新聞紙の發行停止といふ制度のあつた時、如何に巧妙なる陰險な一種の修辭法が發達したかといふことを考へ合せても、此の邊の消息は解せられると信じて居ます。――演説終り。

最後にお願がある。此の文を忽滑谷快天君の演説の前に朗讀して下さい。さうすると、忽滑谷君の演題、「前辯士曰く」の「前辯士」が亡くなる。

先生大に困る。其の困る所が大いに面白いのである。

(明治四十年十二月十五日上宮學院の演説)

二 時間厲行

人間が時間を厲行せんなどは餘計なことなり。時間が人間を厲行しさへすれば、夫にて事足れり。

人間死ぬ時が來たらば否應なしに死ぬるなり。此の際遅刻届も延期願も總に用なし。如何に況や病氣缺席をや。此の故にこそ人は死ぬる時の用意を、死なぬうちにするなれ。人世の面白き所は此處に在り。八百長の相撲の如く、待つたを此の間に許すならば、夫こそ醉生夢死、人間の人間らしき所は消えてなくなるべし。

世の中の萬事を此の調子でやつて貰ひたきが、僕の希望なり。僕は嘗て某の宴席に列せるに、お客も主人も盡く出揃ひてありながら、藝妓が來揃

はぬとて、長々と引つ張られしことあり。其の時は、しみじみと僕も藝妓全廢論に賛成せんかと考へたり。

歸りて之を人に語れるに、其の人かんらくと笑つて曰く、是れ尋常茶飯の事のみ。藝妓が出揃はぬとて始めざりければこそ可笑しうも聞ゆれ。今の世の宴會といふものは、藝妓が席に居なくなるのをしほに切り上げるが常なり。夫れ去らずんば終らず、如何ぞ來らずんば始めざるを怪しまんや。宴會に雇はれて來ながら、其の散するを見届けもやらで腰を上ぐる藝妓も藝妓ながら、藝妓の歸らざらん限りは、何時迄ものんべんくらりと飲んでゐるお客も随分お客なり。畢竟是れ天の配劑妙なるかなである。何が「である」であらうぞや。斯ういふ奴原を相手に時間厲行を説くは愚の至り也。人間厲行を先決問題となす。(明治四十四年二月、新佛教)

三 やかましきは女

女といふは、口やかましくうるさい者である。十人が十人ながら必ずさうとも限るまいが、兎に角女といへば、概して口のやかましいものと、昔から相場が定つてゐる。お氣の毒だが今更いたし方もない。ちと慎まざるべけんやとでも申し上げたい。

凡そ女の口喧しいことたるや、女の字を三つ合せて「姦し」と讀むに見ても察せらる。佛蘭西語に語尾の *ence* を以て終る名詞は殆ど盡く女性であるが、獨り *Silence* (無言)といふ言葉だけは、*ence* の語尾を持つてゐるに拘らず、男性名詞として扱はれて居る。俗説の解する所に據れば、女に「無言」のあらうやうはないといふのださうな。

ホーソーンの小品の中に、「二人は呆氣に取られて言葉なかりき、一人は辯護士にして今一人は若き女なりけれど、(the couple were struck speechless, though one was a lawyer and the other a young lady)」とある。辯

護士と女とは昔から口喧しいものと認められてゐたものと見える。リットンの「ボムベイの末路」の中に、さる男がくどくどと神に祈をさふげて見るが、一向神の方から返答がないのをもどかしがつて、『御身はよも女神にはあらず。さらば斯ばかり長く口を噤み居玉ふことなかるべしと思へばなり。(You are not a lady, that's clear, or you would not keep silence so long.)』と言つてゐる。二千年前も今も女の口のうるさかつた事は一つであつたらしい。

英語に、口のやかましい、うるさい女といふ意味の言葉が、好いたほどある。其の一は Scold で、ホキッチアの詩の中に、

Wrinkled scolds with hands on hips,

Girls in bloom of cheek and lips,—

腰に両手を置ける皺くちやの婢ア共と

頬や唇の色さながら花の如き若き娘と

などあるが夫だ。其の二は Shrew で、之は歳暮に帝國劇場で演じたウキルキー一座の沙翁劇中に「悍婦馴らし」(The Taming of the Shrew) といふのがあつて今尙人の耳に新である。其の三は Ternagant で、其の四は Vixen (牝狐)。此の一つは稀に男にも使ふが、主として女に用ふる。其の五は Virago、其の六は Amazon。此等は男まさりの頑丈造りで喧しいのだから、愈々以て始末に終へない。其の外別に、例のソクラチスの喧しい嬢 Kantippe の名が、其の儘普通名詞となつて、矢張口のうるさい女の事に用ひられてゐる。斯様に取りかへ引きかへ同じ意味の言葉の數多く出来たのは、畢竟時々新しいのを取り代へなければ、耳が麻痺して強い意味に聞えなくなるからである。今に Suttageite (婦人參政權運動の徒) なども、Virago と同じく、斯ういふ喧し屋の意に用ひらるゝやうになるに相違ない。

おてんば、おちやツびい、おきやん、きやツきや、——數へれば日本にも随分同じやうな言葉がある。(大正二年一月「新婦人」)

由実

魚を得ることは、網の一目によるなれど、衆目の力なければ、之を得ること難し。—神皇正統記

ペンギン

▲主として、シヤツクトン、スコット、クック、ジェルラーシユ、ウアルロ
グレキントク及ノルデンシヨルドの五家の南極探検記に據る。

南極の一夜は、遠山の雪から明ける。

さても其の明けかゝる様の、奇しくも美しく見ゆるかな。今更事新しげに説くでもないが、南極圏と日本とは、間に赤道を隔て南北相對するが爲に、凡て四時が逆になる。彼方の冬は此方の夏、日本の艶陽三月は、正しく南極圏内の秋風落葉たる秋に當る。先づ十二月一月は盛夏の頃、二月の末から三月にかけては、早や秋風が立つ。四月から七八月頃迄が冬で、九月の末か十月の初には初めて春が明ける。地球の南の果の果あつて、日が出て低い處を周るばかり、之が夏の間は、殆ど地平線下に没するこ

となく、七十幾日かは晝間許りで打ち續くが、さて冬となると、其の反對に日は没したきりで、七十幾日かの間夜ばかり續く。

其の夜許り續く冬の一夜の心細さを、其の道の人の書いたもので調べて見ると、緯度の高低に依つて多少の相違はあるが、先づ日は四月頃から次第に短くなつて、出たかと思ふうち且入つたものが、五月の中頃に至つて、全く消えてなくなつて了ふ。初は正午頃に北の方で少し明るくなるが、頃ては夫も消えて、世は明るるを知らぬ常闇の夜となる。何かの故障で電燈が一寸消えてさへ不快千萬なものを、之が七十餘日消え續けとあつては、逆もこれだけでさへ堪るものでもない。況や其の頃は又冬の最中として、日本などでは知られぬ寒さ。華氏の氷點下五十度などいふのが珍らしくも何ともない上に、時には大烈風が雪を捲いて打ち附けて来る。偶々空晴れた時外面に出たとて、見ゆるは僅に微かな星の影と氷の破目に動く潮の光位、

氣のめいるのも無理はない。

斯うなると、血液の循環が鈍くなつて、人間は無暗に意氣地がなくなる。深く物を考へることは出来ず、少し骨の折れる仕事は出来ず、氣が結ばれて小さな事にも腹が立つ。心動が弱くなる、不規則になる、時には止る。其の上頭痛がする、不眠症を起す、極地貧血症といふ不愉快な病氣が出る。筋肉が柔くなつて、顔色が青くなつて、膚が變に脂肪ぎつて来る。造化自然の妙とでも言ふか、毛髪が不思議に延び易くなつて、爪の生際の皮が、動もすれば、爪の上になんか押つ覆さるやうに延びて来る。

大風雪の時は、颯々の聲今にも船を覆し家を倒さんす聞えるが、風靜かなる時は、時の氣温の加減で氷の裂ける音、氷の縮む音、氷のしめつくる音などが、さながらばん／＼と銃聲のやうにも聞えれば、又う／＼／＼と人の呻くやうにも聞える。稀に氷の破れた間で鯨がぶちや／＼と寝返りを

打つとか、海豹が氷の中から飛び出すとか、さては冬來ぬ前に立ち後れた極地の鳥が、何事に感じてか哀しげに鳴き出しでもすることがあると、生物の戀しさに焦れ切つた折とて、どれ程心丈夫に愉快を感ずるか知れぬといふ。

此の永い一夜が七月の初頃から明けかゝる。明けかゝるといふのは、正午頃北の方が少し薄明くなるだけのこと、月の下旬になつて、日が初めて一寸出る。平地ではまだ丸で目に見えぬ頃にも、遠山の巔には一寸日がさす。日がさすと、巔の雪が其の光を受けて、ぼうと紅に見える。此の紅に光る遠山の雪の外、大天大地はまだ黒暗の鬼窟裏で、殆ど咫尺を辨せぬ鳥羽玉の暗だ。之が幾日幾十日か経つて、次第に光は麓に落ち、氷雪の上に落ちると、廓落たる乾坤此に全く明け放れて、一面皚々たる南極圏の朝ぼらけ、目も遙に續く萬頃の氷雪中に、遠近に聳ゆる大小さまざまの

氷山は、様々に屈折する日の光を受けて、或は紅に、或は緑に、さては濃い紫に、薄き黄に、照り榮える。美しいなど言ふ許りでない。愈々南極の夜が明けて、春が来た。

春來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともなく北の方海を泳ぎ渡つて、此の南極圏に押し寄する一群の奇怪千萬な鳥がある。之が氷の上に泳ぎ著くと、さながら隊伍を組んだやうに打ち連れて、立つて歩いて行く。

別人でもない、ペンギンである。

二

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものはない。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には黒、腹には白の綿毛が一抔に生えて、兩の翼が短く垂れてある。翼と

言つても、短いから之で飛ぶ譯に行かぬ。唯時々之をふたくと上下に叩いて、一には身體の調子を取り、一には之を敵と戦ふ時の武器に使ふ。見たところは、さながら小作りな人間が黒の燕尾服に白の短袴、白の洋袴で、両手を振つて歩くやうな。或種のペンギンは、丁度襟の處に黒い線があるので、丸で黒の襟飾を締めたやうにも見える。

人間に似た所はこれ許りでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。春先此の南極圏へ移つて来て、然るべき處へ銘々の巢を作つて了へば、農閑の伊勢詣りともいふ風に、大勢連團體を組んで旅行に出かける。其の出かける時は一人の總指揮官が有つて、一同は其の命に従つて連れ立つて行く。ペンギンの殖民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間に何等かの社會的制裁が行はれるものと見えて、餘り甚しい喧嘩はしない。

中には近所に親を失つた身なし子鳥が、心細げに巢に取り残されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引き取つて、養育一切の世話を焼くといふやうな義侠心に富んだ奴もある。又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥共例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合はせて互に嘲り合ふ。此處等も頗る人間に似てゐる。善惡共に人間に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつたと、探検家ノルデンシヨルドも言つてゐる。

或る易斷の大家とかど白瀬中尉の許へ寄越した豫言書の中に、「南極圏に上陸すると、高さ三尺許りの背黒く腹白き鳥が立つて歩いて来て、丁寧にお辭儀をする。之は南極地方の王であるから、粗略に取り扱はず、隊員一同も恭しく之に答禮すべし、」とか何とか書いてあつた。丁度ペンギンの事に當る。殊に南極地方の「王」などと言ふのは、エンペロル（帝王）種の

ペンギンの名でも、何うかした拍子に傳はつたのであるまいか。

ペンギンには色々種類がある。アデリー種といふのは最も普通で、之が居る所には何十萬といふ程集つてゐる。ウラルヒグレキングの探検記中には、「南極圏の倫敦」と題する圖が有つて、小山の頂から麓へかけて、隙間もなく一面にペンギンの群つてゐる所が描いてある。倫敦の動物園に飼養してゐるのも亦之で、之は脊の高さ一尺許りの可愛いのである。次にエムペロール種といふのは、之よりも大分大きいらしい。以上の二種の外に、アンタークチカ種バブア種などある。

種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一である。翼が小さくて飛ぶことの出来ぬ者が、何うして海を隔てた北の方から涉つて來るかといふと、之は前にも言つた通り泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止まる。泳ぐに脚を使

はぬことは、ウラルヒグレキングが兩脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行つたといふのでも知れる。

水では泳ぐが陸では歩く。所で敵に追ひ掛けられたとか、何とかで、大急ぎに駆け出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で櫂の様に氷の上を滑り走る。其の早いことは到底人間業で追ひつけぬ位である。

三

春深き九月十月の頃を以て、ペンギンは盛に此の南極圏内にやつて來る。來ると先づ第一に穴を掘つて、巢を構へる支度をする。穴が出來上れば、雄鳥はすつくと其の穴の中に突ツ立ち上つて、咽喉も裂けよと許り懸命の聲を張り上げて、長嘯して雌を呼ぶ。蒙昧なる我等人間の耳には、唯「があア、があア、があア」と聞ゆるに止まるが、ペンギンが聞けば「男年

三十、身體強健にして一切繁累なし。月收目下百五十圓、追々増加の見込あり。二十歳前後の體健全血正の婦人を求む」とでも聞ゆるものと見える。間もなく此の聲に應じて雌が出て来る。此の「があア、があア」の聲がぼつ／＼と一二羽宛でもやることか、ペンギンの全殖民地にある何萬といふ雄が殆ど同時にやり出すのだから、其の喧しいこと／＼いつたら、話にも何にもなつたものぢやない。

似合の夫婦が出来上つて後、夫婦で小石を拾ひ歩いて、巢に持つて来る。此の小石はペンギンの巢には缺くべからざる家財であるが、夫が一寸近い處で手に入り難い。其處で人の悪い——いや鳥の悪い奴になると、他人の巢にあるのを盗んで来る。其の盗んで来る様を見てゐると、先づ先方の不在を確かめて後、八方に目を配つて四邊近所に見る人なきを見定めてから、手早く盗み出す。盗んで歸る途中、生憎と先方のペンギンに見つかり、

如何にも極りの悪さうな顔をして、人知れず啣へた小石を棄てて置いて逃げ歸る。丸で人間のするやうなことをする。

頓て雌が卵を生む。卵は大概二個しか生まぬが、之を夫婦で交み送りに温める。卵子を温める時、百千萬羽銘々思ひ／＼の方へ顔を向けてゐるが、さて一朝にして嵐が吹き出すとなると、言ひ合はさねど、百千萬羽一齊に盡く顔を東南に向ける。ペンギンは本能的に南極圏の嵐が常に東南から吹くのを心得てゐるから、風の方に顔を向けぬと、吹き飛ばされるを恐るゝのである。現に子鳥には出来るだけ澤山物を食せて、出来るだけ腹を太くさせておくのも、一には營養の爲たること勿論であるが、一には斯うして据りよくして風に吹き飛ばされぬやうにするのだと、例のウラルヒグレキンは説いてゐる。まさかとも思ふが。

卵が孵つて子鳥が出来ると、又もや夫婦がかはり合つて、一人が餌をあ

さりに出かければ、一人は子鳥の番をする。子供は嬪任せにして置いて、親父は啣へ揚枝に鼻唄か何かで、河岸をぶらつかうなどいふ、そんな不心得な者は居ない。折ふし子鳥が這ひ出して、歸途に己の巢を忘れることがある。己むを得ず其の邊に有り合す餘所の巢へのたり込むと、無愛想な奴は四の五の言はせず、嘴でつゞき出してたふが、中には其の儘食客となつて入り浸つて了ふのもある。長火鉢の前に脂下る奴も、探せばないでもあるまい。

己の巢を見失ふのは子鳥許りでない。何しろ何萬といふのが一所に恰好の似た巢を構へてゐるのだから、親鳥と雖も時としては巢を忘れることがある。其の時は理不盡にも他人の巢へ押し寄せて、力づくで主人を追ひ出して後居直る奴もある。主人の不在らしい巢を見つけ出して、其の儘轉がり込んで了ふ奴もある。時としては、兩敵互に巢の奪ひ合ひで戦つてゐる

中、雙方へ助太刀やら三國干渉やらが始まつて、一大混戦を此の殖民地内に演ずることもある。

ペンギンは平生おとなしい平和な鳥だが、いざ喧嘩となると中々強い。嘴でつつく、脚で蹴る、例の短い翼でひッ叩く。犬などは屢々負ける。ひどく翼で叩くと、人間の腕位は折れるといふ。

四

此の烈寒無人の境に在つて、ペンギンは何を食つてゐるかといふと、主として魚類である。南極地方の海には一種の小蝦があるので、之を又好んで食ふ。その他各種の軟體動物も食へば、海草の類も食ふ。人間が水を飲むやうに、ペンギンはしたゝかに雪を食ふ。ペンギンを殺して腹を割いて見ると、胃袋には必ず小石や砂利がある。小石や砂利までも食ふものに見える。

ペンギンは寒さを知らぬ。如何に寒い時でも、平気で水の中を泳ぎもすれば、平気で雪の中を歩きまはりもする。何しろ彼の暖かさうな毛皮があつて、其の下には厚い脂肪がある。暖いも道理である。聞けば、シャックルトンの冬營地は、丁度ペンギンの殖民地の近邊に在つて、春さきペンギンは立錐の地を遺さず集つて來た。所が或る夜大風雪が吹きすさんで一夜やまなかつたが、さて翌朝になると、さしも何萬といふ數を知らぬ位集つてゐたペンギンが、一夜の中に殆ど半分に減つてゐた。さては流石のペンギンも風に吹き飛ばされたか、雪に凍えて死んだのだらうとばかり思つてゐたら、焉んぞ知らん、此等姿を隠したペンギンといふのは、盡く雪の下に埋つただけで、頓て晝近くなつて、世間が大分暖まると、一同申し合せたやうに、雪をかきわけてもぐり出て來た。正しく小栗判官満重といふ體たらく。

ペンギンは可愛い恰好の鳥である上に、其の容貌動作が、如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。第一に、人を人とも恐れず、丸で友達のやうに人の側へ寄つて來て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢で之を聴きに來る。さうして互に顔を見合せて、如何にも感に堪へたやうな顔をし合ふ。それに又容易に人に馴れて、現にシャックルトン一行中のマレーといふのが、之を二羽捕つて來て、名をつけ餌を與へて愛養してゐたが、可愛い哉、彼等は腹がへると、マレーの指をつつつきに行き、遠くに遊びに出てゐても、名をさへ呼べば飛んで歸り、マレー一たび外に出づれば、二羽ともひよこくと尻をふり立て、ひたもの其の後を追ひまはして、尾いて行かねば承知しなかつたといふ。ペンギンの用はたゞ此の慰みになるばかりでない。春風をよくと吹く十月頃には、之が大きな白い丸い玉子を生む。之を以てオムレッツを作り、

ハムエグスを作り、さては玉子酒(?)をさへ作るに足る。ノルデンシヨルドの一行中には、一時に之を三十六個食つた剛の者さへあつた。恐れながら誰やら以上である。探検家中には、萬一救助船が着かぬ爲、一年餘分に越年をする必要があるかも知れぬとて、春の間に、此の玉子を取つておく者がある。右のノルデンシヨルドの時には六千個を貯へ、ウオルヒグレキングの時には四千個取つておいたとある。夥しいものと見える。

玉子ばかりかは、其の肉も喰へる。南極探検家には生肉を食ふ必要があるので、ペンギンの肉が盛に用ひられるが、併しどんな味がするかといはれると一寸困る。去年北極探検で大失敗をやつたドクトル、クックの南極探検記に曰く、ペンギンの肉は、牛肉と臭い鱈の肉とカンバス鴨の肉とを一つの鍋に入れて、血と肝油とで、ぐちやくに煮たやうな味のものだと、さては能く油臭いものに相違ない。だから一旦水煮にして脂肪を抜い

て更に煮直すと、初めてやゝ食ふに堪へる。人の悪いクックは、ペンギンに一箸つけた時の人々の模様をくはしく書いてある。何さま餘り結構なものではなささうな。

ペンギンの味は、魚と鳥との合の子みたいだといふが、ペンギン自身は魚と鳥との合の子である。脊中には鱗のやうな羽が一面に生えて、兩脇には鰭のやうな翼がある。さうして魚のやうに、水の中で一生の大部分は明し暮す。

五

近頃よく「をさまつてゐる」といふ言葉を使ふ人があるが、ペンギンの容態は、此の「をさまつてゐる」の一語に盡きる。ペンギンほど大をさまりにをさまつた奴はあんまりあるまい。僕の見たのはアデリー種の一尺位のものだつたが、之が例の燕尾服白短袴ですまし返つて、水際をうろつ

てゐる所は、いやはや呑みこんだものであつた。身の丈三尺もあるといふ
 エムペロール種のをさまり方が思ひやられる。又況や第三紀層のペンギンの
 枯骨は人間ほどの大きさであつたといふから、其の時のをさまり方も想像
 に餘りある。

ペンギンは滅多に他と争はぬ。人間に對しても犬に對しても、格別恐れ
 もせず、又格別手向ひもしない。ペンギンの殖民地の中へ、人間がのさの
 さと歩いて行つても、孰れも一向平気で、新種のペンギンが來たとも思
 つてゐるらしい様子だ。偶々人が相手にしやうとしても、ペンギンは其の
 ぎよろりとした眼玉を光らして、胡亂臭さうに人の顔を見つめながら、お
 づおづと後しざりをするだけである。ペンギンの群つた中を故意に疾走す
 るとか、又はペンギンの體に手を觸れるとかすると、流石に驚いて飛び立
 つことがある。

ペンギンの音楽を好むのは有名な話で、白耳義のジェルラーシユの率ゐ
 た探検隊の乗船ベルヂカ號が十三個月間氷に閉ぢこめられた時、折々奏樂
 をやると、何處よりともなくペンギンが船までやつて來た。宜い加減に集
 つたのを見計らつて、之を捕へて糧食に供したといふ。シヤックルトンの
 時も、一行中の滑稽家マーストンが時々蓄音機を氷の上に持ち出して、や
 つて見せた。するとペンギンが十羽二十羽と追々に集つて來て、遠巻に之
 を取り圍んで感心して聞いてゐたといふ。

何分氷雪の外に見るものゝない處とて、よく／＼無聊に苦しむものと見
 えて、何かかはつたことがあると、ペンギン共随分遠方まで見に來る。大
 勢で來る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。シヤック
 ルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、
 ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに熱心に見に

来たといふ。

大勢連れのペンギンが途中ペンギンか人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一行中の雄が一羽出て來て、恭しく首を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には唯カ、ガア／＼と聞ゆるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、初めて首を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか」と言ふ風だ。

元より以てお分りになるべき筈のものでない。人間はほかんとして立つたまゝだ。此に於てペンギンは、此奴分らぬわいなと見て取つて、今一度前の挨拶を長々と繰り返す。夫でも分らぬと見たら、今度は他のペンギン共ががや／＼言つて承知しない。其處で前に挨拶に出た男は、大に面目を

失つて引き下ると、今度は代り合ひまして代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て來て、又前と同じカ、ガア／＼をやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長臺詞も面白半分我慢して聞いてやるが、之が犬でどもあつたら、夫こそ騒だ。シャックルトンの中にある話だが、或る時ペンギン共右の順序で犬に挨拶をしたが、元より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立て三羽一時に例のカ、ガア／＼をやり出した。犬は面喰つてわい／＼と吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。之を見てゐた人間は孰も腹を抱へざるはなかつた。

最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは、南極圈内及其の附近である。北極のオークといふのが、之に似てゐるとして、一に之を「北極のペンギン」と稱へることがあるが、之は丸で種類が違つてゐる。(明治四十三年九月、東京朝日)

伯林の春衣

春が来ると、何時も伯林に著いた日の事を憶ひ出す。

夜の十時に彼得堡を出て、一日二夜汽車に乗り通して、朝の五時頃伯林に著いた。停車場を出て、何心なく彼方を見渡せば、道の兩側の並樹には、いつしか若葉が青々と茂つてゐる。シベリア以來、明けても暮れても、雪ばかり見て居たものが、今朝はしも、起きると直ぐ、目の覺めるやうな緑の色に接したので、いひ知らず氣が浮き立つて、如何さま何うやらして心の時めくといふは、こんなことかと思つた。

春だ〜と口の中でつぶやきながら、馬車をポツツダム、ブラツツの方へ飛ばせたが、春だけに、朝早くから人の往來が繁い。途中かけ違ふ所の馬車電車の老若男女の客、いづれも春の装、輕らに著做して、自動車のガ

ソリン臭い烟をのこして走せ行くのも、春めかしい。自ら反さうするに、僕の厚ぼつたい大外套を著こんで、露西亞の雪道に穿きなれたガローシを穿いた様、どう見ても此の邊の山奥で生捕りましたる何とかに似てゐる。急ぎ春衣を新調せずんばあるべからずと思つた。

ホテルに著くと、睡たさうな顔をした番頭が出て来て、生憎お客が一杯で、風呂場しか明いて居らぬが、今晚まで之で辛抱して呉れぬかといふ。夫れ惟みるに、心時めきながら、ガローシを穿いて、風呂場に泊るなどは、一寸おつである。僕は早速承知した。番頭氏乃ち鞠躬如として案内したところを見ると、成程、四階だか五階だかの隅の、べらぼうに長い、三角形の部屋で、風呂もある、雪隠もある、その側にベッドも一つ置いてある。窓は天井のついでに、ステインド、グラスのはひつた天窓のやうなのが一つあるきり。見はらしも何もないのは勿論のこと、部屋の中はぼやツとし

て變に薄暗い。丸で下手な牢屋の體たらく、——が併し之でも世間は春だ。先づ番頭を追ひやつておいて、露西亞以來の糞を垂れる。少しは春臭い。夫から電燈をつけて、自ら風呂の湯を加減して飛び込む。大分春らしくなつて来た。今度は髭を剃り爪を切り、旅の姿をすっかり改めて、下へ下りて朝食をした。之でいよいよ腹までが春めかしくなつて来た。

其の夜春衣の假縫が出来て、翌日ちやんと仕立上が届けられた時、僕の身に春初めて全かつた。(明治四十四年四月九日、大阪朝日)

サヤク

妻といさかひて

「なせ、そんな顔していらッしやるの」と女房が問ふ。前夜おそく歸つて、朝寢しておそく朝食の膳に着いた時。

「なせ、そんな顔していらッしやる！」おれは生得こんな顔である。なせだか何だか、おれの知つたことでない。之を石川理學博士にでも聞かれるなら、格別の不思議もないが、十五年連れ添つた女房が尋ねるに至つては、蓋し驚く。

亭主の顔を見て、「なせ、そんな顔」などは、あまりとしても曲がない。そも／＼氣も心も知り合つた中に「なせ」といふやうなインタロガチヴな言葉はいらぬ筈である。「今日は家で夕飯を食はない」といへば、なせと大きく。「今晚は多分外で泊る」といへば、どうしてと来る。「おれはちと腹

が痛い』といへば、どういふ譯でせうと申す。『あゝ何か食いたい。』どうして？『何だか變に寒い。』なせなんでせう？やれ／＼面倒臭い、一々そんなに聞くな。一體女房が豫審判事の心持でゐて呉れては困る。おれは女房の亭主であつて、刑事被告人ではないぞ。

おれを信任しろよ。渾身の愛と全幅の誠とを捧げて、おれを天の如く地の如く信任したら、何が起らうと疑問の餘地があるものでない。『なせ雨が降る』『なせ今日は寒い』と一々空を仰いで尋ねる奴が、何處の國にあるか。維摩の一黙は雷の如しとある。ぐ／＼聞き質さなくても、分つてゐる者には分つてゐる筈である。和尚今日尊候如何と問はれて、日面佛月面佛と答へた禪客の挨拶は無上におれの氣に入る。なせも絲瓜もあるものでない。おれの國では、あんまり小うるさく、なせ／＼と問ふものがあると、よく『なせかなんば、尾の生えた燕』といつて茶かす。「なんば」とは唐蜀黍

のことである。『如何なる理由の下に唐蜀黍は尾の生えた燕の如くなる乎』といふのである。そんなことが誰に分るものだらうか。馬鹿々々しいことを尋ねるものでない。

おれだつて仕事の都合で夜おそくなることもある。氣がむいたなら外に泊ることもある。どうかした場合には魔性の女の出る席へ出入することもある。友達と酒を飲んで夜ふける迄歸るを忘れることもある。おれの金で、おれの時間を費して、おれの手腕と、おれの信仰と、おれの知識と、おれの識見とを以て、おれがおれのして然るべしと信ずる所をするに、女房が之を危ツかしがるのは事體間違つてゐる。おれが何をしやうと、どんな顔をしやうと、我が愛する所の亭主が其の識見とやらですることなら、よも間違つたことはあるまいと、堅く信任して、餘計な質問をするな。――時々急所を突かれてうろたへるから言ふのではないぞ。

おれが今夜切腹して相果てるぞと言つて聞かせても、亭主のすることならよくくの譯があつてすることだらうと安心して、故障の申立は愚か、一言半句の質問をさへ試みぬやうな悠然たる女房であつてほしい。分つたか。

分つたなら言ふが、おれのこんな顔をしてゐるのは生れ付もあるが、實は今朝からまだ手水を使はないのだ。(大正三年一月「新佛教」)

へちまのかは終

製複許不



はかのまちへ
錢拾貳圓壹金價定

大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日
大正三年四月十八日

大正名義文庫 第參編

著者 杉村 廣太郎

發行者 加島 虎吉

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

印刷者 神谷 岩次郎

社會式株刷印京東 所刷印

發兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
人形町通住吉町

電話本局三六六番二一六七番
電話本局一七四番
電話本局一九四九番
電話本局一九八四二番

至誠堂書店
至誠堂小賣部

大正著名文庫

好評湧出天下無比

第一編

法學博士 和田垣謙三先生著

兔糞錄

挿畫 川村清雄畫伯 三色版 二葉 齋藤松洲畫伯 木版 三葉

定價 金壹圓貳拾錢
紙數 三百五十頁
支那 郵稅 金貳拾錢

批評一斑

◎東京朝日新聞曰、折に觸れ時に應じ興來り情湧く毎にポツリポツリポロポロ飛び出したるもの即ち是れとこれ兔糞錄の名ある所以なり所謂和田垣一流の洒落狂歌を亂發し得意の英語を應用し詩歌俳諧を自由に雜へて意表外の落を取る等をして覺えず哄笑を禁ずる能ざらしか。◎萬朝報、時に應じ折に觸れ二つ三つ宛飛びくりに讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウイットとユーモアの人を魅するものあればなり◎時事新報、博士の氣焔録吐噴録にして例の縦横自在なる滑稽と皮肉はいかなる人をも噴飯せしめ感服せしめずんば止まず其豐富なる學識を遠慮なく吐噴する處博士ならでは見られぬ所也◎二六、酒脱滑稽頤を解くもあれば諷刺辛辣骨に

大正出版界を震動せ破天荒の一大快著

徹するもあり就中英語彙兒行一篇は純文學として妙技神に入る近來の一大快著◎實業世界、收むる所百卅篇悉く金玉の響きあらざるはなし博士例の輕妙洒脱飄逸奇抜奇想落天外の構想により噴出したるもの一讀再讀三讀尙且つ飽くを知らざらしむ兔に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む然るに我知らずフンと噴き出して向側の乘客に怪しまるゝと屢也宅に持ち歸りて讀む又しても爲せば一時に笑聲起りてフン所に非ずキヤツキヤと叫ぶ評者は腹を解き腹を抱へ泣かされたり實に滑稽の奥に涙を藏し諧謔の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む今古獨歩なり請ふ何人も一本を手にし賜へ……

東京日本橋區 至誠堂 發兌
電話本局三六六番
東京市 至誠堂 發兌
電話本局三六六番

大正著名文庫

第二編

大町桂月先生著 ▲裝幀 川村清雄畫伯

人の運

四六判 特製美本
紙數 四百餘頁
定價 金壹圓貳拾錢
郵稅 內 地 八錢
支那 郵稅 金貳拾錢

内容目次一斑

◎大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年二月全國青年の讀物として近來の傑作として審査選定せらる

◎運は運也運轉する也●獨斷の人を去つて果斷の人に来る●頑固の人を去つて自信ある人に来る●酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に来る●女に迷ふ人を去つて女に優しき人に来る●屁理窟云ふ人を去つて道理を解する人に来る●躁急の人を去つて勇往の人に来る●心の動く人を去つて才智の動く人に来る●己に寛大なる人を去つて人に寛大なる人に来る●自暴を起す人を去つて憤を發する人に来る●人を怨む人を去つて人を愛する人に来る●肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に来る●自ら悔む人を去つて分を守る人に来る●怒の多き人を去つて怒の大なる人に来る●傍觀する人を去つて奮闘する人に来る●顧慮する人を去つて熟慮する人に来る●厭き易き人を去つて見切の善き人に来る●小事に拘泥する人を去つて小事を忽にせざる人に来る●人を恐るゝ人を去つて天を恐るゝ人に来る●過去を思ふ人を去つて現在を思ふ人に来る●現在を思ふ人を去つて未來を思ふ人に来る●餘論には人相陶宮九星八卦御圖判斷相性等在來世俗の褻視せる所をも洩さず警拔人の意表に出づ●請ふ何人も一本を座右に備へて開運の眞理を自覺あれ

東京市 至誠堂 發兌
電話本局三六六番
東京市 至誠堂 發兌
電話本局三六六番

大正著名文庫

杉村楚人冠先生著

へちまのかは

第三編

本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が二十餘年の心血を凝がれたる力作なり。即ち嘗て秩序紊亂の廉を以て發賣禁止の嚴命を蒙りたる「七花八裂」の中より先生會心の諸篇を抜き、之に全く絶版に歸したる一属人語「中の名篇傑作を添へ、更に新に其後の新作數十篇を加へたるもの、行文流暢趣味深甚、逸氣紙上に横逸す、正に是れ、先生一代の傑作集にして、近來稀有の一大快著。

四六版特製美本全
紙數四百五十頁
定價金壹圓貳拾錢
郵税金八錢 清鮮金廿錢

浪六先生著

罵倒録

第四編

浪六先生曰く、「あまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど實際これが我輩の近來に於ける快文字なり」と、其縱横無盡の快筆は社會萬般のあらゆるものに對して吐き出したる罵倒録にして警句あり冷笑あり諷刺あり一讀興趣湧出して巻を捲ふ能はざらむ以て本書の内容を知らるべし。

四六版特製美裝全
紙數三百九十頁
定價金壹圓貳拾錢
郵税金八錢 清鮮金廿錢

▲口繪及び裝幀 著者浪六先生自書

浪六先生著

男女の戦ひ

口繪 寫眞 コロタイプ版
菊判美裝紙數三百頁

定價金九錢
郵税金八錢

誠實の和睦は戦ひの後にあり神聖の戀愛は男女衝突の後に生ず

男女あらゆる階級の衝突
男女あらゆる思想の衝突
是れを讀まざるもの今日の男女にあらず、

男女の戦ひ

口繪 コロタイプ版
菊判美裝紙數三百頁

定價金九錢
郵税金八錢

社會あらゆる階級を網羅せし男女の戦ひ、いよ／＼白兵戦に入る、男女兩性を赤裸々に剥き出したる人生の裏面史なり、

黒雲

口繪 北澤樂天畫伯
菊判美裝紙數三百頁

定價金九錢
郵税金八錢

讀賣新聞曰く、本篇のヒーローインは所謂、曠天下の標本である。細君の鼻息を伺ふ牧野貞一の心中の不調さ、可笑さを、見るに見兼ねた孫落葉放の田村剛三、竹馬の友の腹を思ひやり、自ら進んで家庭の離局に當り、彼の好妻を取持つて、牧野の悲觀病を救ふと云ふ所、局を結んで居る。蓋し浪六氏の小説は、強と弱と醜と美とのコントラストが巧に描かれてゐる所に絶大の興味がある。

雪達摩

口繪 清方畫伯
木版廿五度刷
菊判美裝紙數三百六十頁

定價金壹圓
郵税金二十錢

この首、伊達には所持いたさず候、入用次第賣渡し申候、但し天下取りの鐵面冠者に限る」と嗜き出せし快男子が面目は、浪六先生獨得の痛快なる筆によりて遠慮なく現はされたり、正に是れ小説よりも奇なる事實譚、歴史よりも趣味深き戦國時代の裏面史なり。

東京市東區本町三丁目六六六番 電話本局三六六番 東京電報局一七四番 發兌 至誠堂

東京市東區本町三丁目六六六番 電話本局三六六番 東京電報局一七四番 發兌 至誠堂

新譯漢文叢書第一編

大町桂月先生譯評

日本外史

袖珍三五形美本
定價金一圓五十錢

特小 價金 壹圓 拾八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を賭るが如く大義爲めに明かに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文叙事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇抜痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまで遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自から寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編

陸軍教授
友田宜剛先生評解

文章軌範

本文新式ゴジツク活字
袖珍三五形携帯至便

正小 價金 壹圓 拾八錢

作文に志す人は必ず文章軌範を讀まざるべからず明治作文教授の泰斗友田宜剛先生が十年の心血を凝ぎたる研鑽の光燦爛として新譯評解文章軌範は世に出たり其の譯其の解其の評最も斬新最も適切優に明治文章の模範化したる點に於ては比類無き無限の光榮を擔へり今其の特長を一言せんか●從來の漢文讀みの通弊たる文法の誤りに深く注意し假名一字をも疎略にせず本文を離れずして而も純粹の明治の文章化せしめたる事其一也●各文の始めに作者の略傳題大意等を附し讀者をして興味津々喜んでその文の始めに作者の略傳題大意等を附し讀者をして懇切なる語釋通解法を附し難語を解せしむること其二也●各節各段に丁談文典東西の修辭法により切實に作文法を教へたる事其三也●更に上欄には本文を掲げて對讀に便し且之れにも古賢の興味深き評語を網羅し讀者の興味を喚起する事其四也●以上の特色を具備する本書は蓋し類書中の白眉と云ふ可し

新譯漢文叢書第三編

濱野知三郎先生註譯

孟子

本文新式ゴジツク活字
袖珍三五形携帯至便

定郵 價金 九圓 拾八錢

●讀賣新聞評 孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄に其本文を掲げ卷末に五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直ちに其全文を求め得るの便に併したり其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なるは支那文學中推して第一位に置くべき者青年子弟の讀物として最も現代に適切の者就中著者の苦心と見るべきは索引の編纂と排列とに力を用ひ此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりの愉快と

●やまと新聞評 其文章は實に奔放自由を極めいつまでも生氣の潑刺たる不朽の天品世界の大文學書である……製本亦堅牢と

新譯漢文叢書第四編

大町桂月先生譯評

日本樂府

本文新式ゴジツク活字
袖珍三五形携帯至便

定郵 價金 五圓 拾六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ、今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず、之を釋し之を評せらる、徹底の見、老熟の筆明快を極めて、渾然として桂月一流の名文となり、朗々誦すべく尊王の詩人、又愛國の詩人として古今に獨步せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ、以て日本歴史を知るべく、以て士氣を鼓舞すべし。日本男兒之を讀まば必ずや案を拍つて起らん

發兌 東本 京石 市町 至誠堂 電話本局三六六番 振替東京一七四四番

發兌 東本 京石 市町 至誠堂 電話本局三六六番 振替東京一七四四番

新譯漢文叢書第五編

大町桂月先生譯評

新譯 日本政記

袖珍クロース 全七册
天金箱入美本

正郵 價稅 八金 拾錢

賴山陽前に日本外史を著して武門の興廢を説き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。先年喧嘩を極めたる南北朝問題の如きも翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刪して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大文章雄健、光錠陸離として實に史界の一大偉觀なり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤謬甚だ多し。大町桂月先生は之を翻譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に解釋を施し、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

東本 京石 市町 至誠堂 電話 本局 三六一 六六四 番

新譯漢文叢書第六編

久保天隨先生譯評

新譯 十八史略

袖珍總クロース 全七册
天金箱入美本

正郵 價稅 八金 拾錢

上下五千年、興亡八十餘朝、この間治亂成敗の跡、必ず其始終を審にし、紀述その要を得、簡明切當、記誦に便なるものを十八史略となす。その書、從來世に行はれ、今に至りて廢せざるもの、豈に偶然ならむや。本書は譯者が特に意を用ひて、之を時文に翻譯せしものにして現代國語の文法に循從し、且つ漢文に特殊なる語彙の緩急を併せ移し、難解の字句には、すべて注脚を施したれば、讀者は熟路に就いて輕車を驅るが如く、容易に、全篇を通覽するを得べく、卷中に挿入せし數百條の評語は、奇警峭拔その史實と相待つて、覺えず案を拍つて快哉を呼ばしむ。加之、篇首には、精細なる解題を載せ、卷末には便利なる新式の索引を添ふ。されば、この書を讀むもの、一は以て容易に東亞ツラン人種の起伏消長を審にするを得べく、一は以て漢籍研究の指針となすべく、その裨益、もとより少々ならず、敢て江湖の一讀を勧む。

東本 京石 市町 至誠堂 電話 本局 三六一 六六四 番

新譯漢文叢書第七編

友田宜剛先生譯評

新譯 續文章軌範

本文新式ゴジック活字 全七册
袖珍三五形携帯至便

正郵 價稅 壹金 拾錢

續文章軌範は、正文軌範と相待ちて、古今作文書の雙壁、古人が心血を凝ぎたる千古の美文、陸離として光彩を放てり。文に志す者は必ず之を座右に致して日夕に師とし友とすべし。作文教授の泰斗友田宜剛先生は、刻苦研鑽多年の營雪を積みて之を完全なる明治の作文模範化せられたり。今其特長を一言せんか、從來漢文讀方の通弊たる文法の誤に深く注意し本文は新式ゴジック振假名付にして難解の字には懇切なる解釋を施し、各文の始めには作者の略傳を附し篇末には文法と論評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を教へ、上欄には原文を掲げて對讀に便す。要するに文章界は本書を得て更に五百燭光を掲げたり。正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し。費はくは江湖の諸彦一書を坐右に備へ給へ。

東本 京石 市町 至誠堂 電話 本局 三六一 六六四 番

新譯漢文叢書第八編

大町桂月先生譯評

新譯 國史略

袖珍總クロース 全五册
天金箱入美本

正郵 價稅 壹金 拾錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年金甌無缺の歴史の實質を知らず人心輕兆となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せむとするは今の世の大患なり世の歴史教科書は唯歴史の骨組のみありて肉なし血なし歴史教育の宜しきを得ざる其大原因ならずんばあらず大町桂月先生は之を慨する所あり先に日本外史日本政記日本樂府を譯され今又國史略を譯する國史略は古來の諸國史の粹を抜き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を開闢に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戸々に誦せられたるにも拘らず漢學教育衰へて此の名著も空しく閑却されんとす今大町先生之を譯し之を解し之を評して有益なる貴重なる國史略茲に復活す

東本 京石 市町 至誠堂 電話 本局 三六一 六六四 番

新譯漢文叢書第九編拾編

久保天隨先生譯補
上下全二冊
袖珍クロース
天金箱入美本

上郵下正各價金壹圓貳錢拾錢

水滸傳は實に支那小説中の隨一たり唯憾むらくは未だ好譯本を得ず坊間流布の書は馬琴僅に筆を十一回に絶ちて十中の九は高井蘭山が岡鳥冠山舊譯の錯誤脱漏を踏襲せるのみ豈日本文壇の一大恥辱に非ずや我天隨先生深く之を慨し拮据數年茲に譯本新に成る先生が支那小説に造詣深きは世既に定評あり其譯文の妥當にして流麗暢達なる固より辯を俟たず波瀾萬丈骨鳴り血湧くの快文字は本書に依りて其眞骨頭を傳ふるを得ん

新譯漢文叢書第十編拾編

大町桂月先生譯解
全拾冊
袖珍クロース
天金箱入美本

上郵下正各價金壹圓貳錢拾錢

孔子は世界三聖の一也論語は孔子の遺訓也東洋思想の本系也日本道徳の教典也論語を解せずば東洋を解すべからず論語我國に入りて既に二千年我國民は能く之を咀嚼し之を活用せり孔子の教は本國に行はれずして却つて日本に行はれたる觀あり然るに世には所謂(論語讀みの論語知らず)なる者少なからず道徳の根柢に古今なし唯風俗人情時勢の異動を察して論語の眞意を解するに非ざれば折角の經典も死物となり害物となる論語を解くには活眼を要す大町桂月先生心血を澆ぐこと二年有半絶代の快筆を揮ひて活眼を以て活書を心解し茲に新譯論語成る譯するのみならず之を詳解せり先生の眼識筆力相俟ちて三千年來の經典新に明治の世に活躍す

新譯漢文叢書第二十編三十編

久保天隨先生譯補
演義三國志
縮刷全二冊
上卷壹千壹百頁
下卷壹千頁

上郵下正各價金壹圓貳錢拾錢

▲支那小説中の隨一▼
三國志は支那小説の隨一たり劉魏吳天下を三分し一代の英俊豪傑亦茲に集り智を争ひ勇を闘はす實に天下戰亂の一大奇局たり支那文學に造詣深き天隨先生新に流暢なる快筆を揮ひ險澁なる原書を譯して面目を一新す卷を繕けば髮髯として刀戟相摩するの聲を聞くが如く光焰萬丈血躍り腕鳴る必ずや案を拍つて起たん

新譯漢文叢書第四十編五十編

大町桂月先生譯評
唐宋八家文
全三十卷 縮刷全二冊
袖珍天全特製
箱入携帶至便

近刊

▲軍國男子必讀の快著▼
漢文の精粹は鍾まりて唐宋八家に在り文章の諸體も亦八家に具備す文章軌範を讀まざる者は門に及んで未だ堂に上らざる者なり殊に我國の寛政の三博士以來賴山陽を始めとし漢文を草する者天下靡然として則を八家に取り以て明治の世に及べり當代文章界の木鐸たる大町桂月先生今茲に之を譯し一々註解し内外先哲の批評をも採録し且つ一文毎に先生獨得の批評を加へ文章の妙を發揮して餘蘊なし漢學に志す者は言ふも更なり苟くも文章に達せんと欲する者は本書を讀まざるべけんや

東京市東本町 至誠堂 發兌

東京市東本町 至誠堂 發兌

東京市東本町 至誠堂 發兌

家庭必備の良書

東京小兒科
病院院長 醫學博士 瀨川昌耆先生述

最新育兒のをしへ

凡そ家庭にありて育兒法ほど大切なるは無し育兒の法を誤れば賢なるものも愚になり強壯なるべき子も病弱になり終に死するに至る育兒法を知らざるは親の義務を果さざる者と云ふべし本書は小兒科専門の名醫瀨川博士が最新の學說と多年の經驗とに徴し丁寧懇篤に恰も手を取り教ふるが如く小兒の保育法を説明せられたるものにて總て是れ育兒上實地に適切なる金科玉條ならざるはなし殊に卷末に附せる牛乳保育法は是れ育兒上の最大要件にして博士の心血を凝して研究せられしもの行文亦極めて通俗平易何人も一讀了解するを得べく實に家庭の一大福音なり

東京小兒科
病院院長 醫學博士 瀨川昌耆先生述

小兒病手當法

小兒が急に發熱したり下痢したりする時に醫者の診療を受くべきは勿論であるが如何なる疾病や過傷でも醫者の來る迄の應急手當が宜しきを得ると否とは治療經過に重大な影響を及ぼすものであります本書は斯道の大家瀨川博士が多年幾多の實驗とあらゆる小兒病傷に就て日常心得べき手當法を極く解り易く素人にも行ひ得るやう説明してあります愛兒を有つ家庭には是非本書をお備へになる事をお勧め致し升

菊版特製美本全一冊

定價金七拾錢

郵税金八錢

菊版特製美本全壹冊

定價金八拾錢

郵税金八錢

東京市東區本町三丁目一七番六三三番
電話本局一七四六番
振替東京一七四六番
發行 至誠堂

熊田葦城先生著 川村清雄畫伯裝幀 寫真百數十個挿入

日本史蹟 大阪陣

冬陣 夏陣
菊版特製金文字入
全二冊紙數各五百頁
定價各金貳圓
特價各金壹圓六拾錢
郵税一兩地各金十二錢
清朝各金三十錢

當代獨
得の地理的
活歴史

徳川家康が難攻不落の大坂城を陥るや計畫慘憺を極め作戦苦心を盡す今古此辛辣の戦なく東西此の悲惨の史なし本編は地理と歴史とを融和する熊田先生獨特の快筆を揮つて其終始曲折を描寫す老雄の面目生動し勇將猛士の苦衷活躍す殊に一々地理を精査して正確なる史實を湊合す三百年前の活歴史なると共に大阪に遊ぶものゝ必携必讀の好案内記

村上浪六先生著

元祿忠魂録

好評噴々五版發賣

菊版特製
箱入美本
全一冊
定價金一圓
郵税金拾二錢

武士道
の精髓

華奢風流の元祿模倣は消ゆる時あるも此年間に染め出せし四十七士の血痕は我國に大和魂の元氣消磨せざる限りは世に消ゆるの時なかるべし月雪の中に生命の捨て處を得たる武士道の華は溢れて書に劇に限りなきも其忠魂義膽天地精華の元氣と一語千金絶妙の波瀾曲折に至りては文壇の雄將浪六先生の筆に俟たざるべからず弊堂の乞ふ事茲に多年豪華の文壇得意の筆を自由萬緑叢中の紅一點として芳ばしく一讀巻を掩ふ能はざる大快著なり

東京市東區本町三丁目一七番六三三番
電話本局一七四六番
振替東京一七四六番
發行 至誠堂

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著

青年諸君

增訂廿壹版 四六版特製

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著

世界商業史要

菊判總タロース特製

皇太子殿下上覧の光榮を賜ふ
和田垣博士中谷無涯兩先生著

戊申體歌

東儀鐵笛先生作曲 訂正八版
東京青學會

和田垣博士戲著
川村書伯紳畫 (三版)

餅

袖珍美本

定價 郵金 一八

定價 郵金 一八

定價 郵金 五二

定價 郵金 廿四

世評一斑

國民新聞曰く、著者の滑稽と妙文とは世の知る所：口を衝いて出る滑稽の圓轉滑脫と智識の該博にして論旨の意表に出る處殆んど敵手無し奇書の一と云ふを憚らず▲中外英字新聞曰く、樂天家にも厭世家にも均しく好伴侶として歓迎せらるべきを信ず思想の豊富なる活氣の横溢するに於て博士の文は確かに當代に冠絶す

本書は太古以來三千年に亘れる世界商業の盛衰を叙し最近英米獨の諸邦覇を太平洋上に争ふの壯觀に及ぶ惟ふに商業史は一面に於て文明史也政治史也古今列國興亡の跡を訪ね世界通商の發達を叙するに於て博引旁證叙事明快本書は博士が獨壇の勝場を示して餘蘊なしに通過せんと欲する者に取ては必携必讀の良書なり

此唱賦は戊申詔書の聖旨を奉體して分り易く面白く小學生徒の方々の諷誦に供せんとするもの、朝な夕なに口吟まれれば畏き御心の程推し奉られて限りなき聖徳に浴するの思あるべし萬民必讀の國民的唱歌として江湖の諸賢に薦む

腹ふくらす所の所謂餅の餅にあらざる(モチ)の種類各種(長持)にも納め切れぬ程澤山(モチ)出したる處先づ讀者の度胸を抜くそれより人生最大の要點なる氣持心持を論じ心は不可思議なるものと題下に此驚妙不可思議なる心の作用を説く小冊子ながら滑稽諧謔の裡に含蓄する眞理教訓は他の萬卷の修身訓話に優る

部數取纏め御注文の節は割引可仕候

東京市東區本町三丁目六番 電話本局一四七番 至誠堂 發兌

鐵道院床次竹二郎先生述

歐米小感

四六判特製

陸軍大學教授
友田宜剛先生著

中等作文自習寶鑑

四六版總タロース
紙數六百餘頁

文學博士
細川男爵閣下題詞

大學中庸註釋

附 學庸索引
附 王陽明大學古本
附 學庸註釋目次

東宮侍講三島博士題詩
竹中信以先生註釋

孝經講話

附 錄 愛吟集
三五形美本携帶至便

定價 郵金 七

定價 郵金 一八

定價 郵金 五

定價 郵金 五

本書は列國文明の源泉たる信念と信仰心とに着目して我邦同胞の頭上に最も適切なる警策を加へたるもの讀一讀必ず啓發する所多かるべし
世評一斑 德富蘇峰氏評に曰く、觀察は更に空谷登音の感あり
山路愛山氏曰く、我等は一々首肯し同感して卒讀す田尻男の文章と共に役人著述中の双璧とすべし(其他好評續出)

作文の友田先生は作文研究のために粉骨碎身す宜なり十年の研鑽天下に其光芒を放つてると本書は先生が特に熱血を凝がれたる傑作なり着想新奇拔着實用趣味高雅一として兼ね備はらざる第一編文話第二編普通文第三編書簡文第四編法要略第五編美辭一編第六編韻文第七編頭等何れも先生が緻密精細なる頭腦と丁寧懇切なる實驗教育の結果より得られる者實に滿天下諸彦が作文の寶鑑なり

讀賣新聞評 ボケツト論語の流行は今や殆んど其の絶頂に達す然かも孔子の道を知らんと欲するものは尙「大學」の門より入りて「中庸」の奥を極めざる可らず著者此に見る所あり豈にボケツト論語を著したる例に倣ひ今又學庸二書を取りて原文並に其讀方釋義を掲げ七欄に於ては別に字義參照等載せ更に五十音順に依りて詳細なる索引及び大學の部に王陽明の定本に係れる古本大學を付したる等頗る用意周到に見るに足る古本の研究に格の修養に大に功あるは云ふに及ばず常に是等の書を懐中にせば必ずや過ちを少なうするを得んか

孝經は人倫の大本を説きたる唯一無二の經典にして歷朝之を奨勵し戸毎に一本を備へしむべき詔勅を下されたることあり其書の尊重すべき復喋喋を要せず此書は本文と總假名付の譯文とを掲げ次に平易流暢の談話體を以て丁寧懇切に講述したるもの漢文學復興の今日苟くも人倫の根原を知らんと欲する者は何人も之を讀め裝釘優美定價至廉取て満天下の青年子弟諸君に薦む

東京市東區本町三丁目六番 電話本局一四七番 至誠堂 發兌

新澤男爵閣下序 川村雷伯 表裝裝禎
 蘆川忠雄先生著 菊版總クローズ美裝

定價 郵金 一圓 二角 二錢

父の書簡

目 概 容 内
 第一 訣の死 第四 信品性の偉大なる勢力、第二 常識の修養、第三 日常談話の要
 第十 大第十 奮闘七儀容の整理、第五 筆蹟の疎放を戒む、第六 金銭の使用
 第十三 全なる意外の語學、第八 世態人情の機微、第九 金銭の運用
 第十六 人生の幸福に達する道

蘆川忠雄先生補譯
 交際 なかれ
 規箴 袖珍美本
 ダイヤモンド

定價 郵金 五冊 四錢

「なかれ」は 日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗練的文章を以て記述
 「なかれ」は 大人が読んで益を得るべき交際上の至宝と云ふべし
 「なかれ」は 洋食の紳士淑女のファッションに必要なる作法と風采を説く
 「なかれ」は 最新の紳士淑女のファッションに必要なる作法と風采を説く
 「なかれ」は 最新の紳士淑女のファッションに必要なる作法と風采を説く

蘆川忠雄先生著
 交際と應對
 菊版上製全一冊

定價 郵金 十冊 六錢

本書は著者独自の創見に基づき其の要訣を明瞭なる才筆を以て記述
 本書は著者独自の創見に基づき其の要訣を明瞭なる才筆を以て記述
 本書は著者独自の創見に基づき其の要訣を明瞭なる才筆を以て記述

蘆川忠雄先生著
 談話術修養
 菊版特製全一冊

定價 郵金 壹拾圓

是れ著者獨特の人物養成論也修養を積んで怠らざれば何人も有爲の人
 物たるに至るべしとの見地よりして現今青年の尤も要求する所を擧げ
 或は其缺陷とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
 明快の筆法を以て縦横無盡に論破せられたるものにして全篇雄大豪宕
 の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
 る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著
 修養と人物
 菊版特製 全一冊

定價 郵金 壹拾圓

是れ著者獨特の人物養成論也修養を積んで怠らざれば何人も有爲の人
 物たるに至るべしとの見地よりして現今青年の尤も要求する所を擧げ
 或は其缺陷とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
 明快の筆法を以て縦横無盡に論破せられたるものにして全篇雄大豪宕
 の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
 る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著
 勤儉の實踐
 菊判 全一冊

定價 郵金 五十六錢

文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競争は益々激甚となり其生存競争
 の最大根柢となるは金錢と時間との分配に在りては之に注意
 する者なりと雖も時間者少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基
 き妙實の切實な時を少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基
 き妙實の切實な時を少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基

蘆川忠雄先生著
 時間の經濟
 菊判 全一冊

定價 郵金 五十六錢

文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競争は益々激甚となり其生存競争
 の最大根柢となるは金錢と時間との分配に在りては之に注意
 する者なりと雖も時間者少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基
 き妙實の切實な時を少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基
 き妙實の切實な時を少し著者其明敏の頭腦より歐米最近の傾向に基

蘆川忠雄先生著
 修養座右錄
 袖珍美本

定價 郵金 十六錢

從來今日の生存競争の多きは千篇一律にて舊套を模倣せるに過ぎず
 斬新の態度に經濟的觀念を以て現行の青年は必ず其舊套を模倣せるに
 無窮の新智識と貴重なる名座を學び得らるゝもの意を周知せしめ其
 無窮の新智識と貴重なる名座を學び得らるゝもの意を周知せしめ其

東京市東區本町 至誠堂 發兌
 電話本局三六六番 電話本局四七四番

東京市東區本町 至誠堂 發兌
 電話本局三六六番 電話本局四七四番

小松原文部大臣閣下題字(五)
樂翁公眞筆版

○天白河樂翁
齋藤松洲畫伯裝幀
川村清雄畫伯裝幀

平田前内務大臣閣下題字
樂翁公眞筆(再版)

○天白河樂翁
齋藤松洲畫伯裝幀
川村清雄畫伯裝幀

前宮内大臣土方久元伯題字
樞密顧問官黒田清綱子題字

○史傳 高山彦九郎
碧瑠璃園著 川村清雄畫伯裝幀(前編)
碧瑠璃園著 川村清雄畫伯裝幀(後編)

番衆浪人著 梶田半古畫伯口繪
齊藤松洲畫伯裝幀

○史傳 後藤又兵衛
菊判特製紙數四百五十餘頁

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

世評一斑

東京朝日曰く、儉約、力行、慈悲、正義の権化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に奕々として現はる家庭の讀物として生ける教訓を與ふべく其の華胄の人たりしたために華族の子弟に讀ませて大なる感化あるべし裝釘の麗美なる事近來の隨一也

世評一斑

實業之世界評、裝幀の美を以て出版界を驚かしたる忠孝小説叢書白河樂翁：前篇後篇と併せて社會の歡迎を受ける事疑なし現時の文壇一方に平民文學興起の傾向あれば一方に斯くの如き貴族的權力者の文學漸く流をなさんとす注目すべき現象と云ふ可し▲新小説曰く、家庭に於ける婦女の團圓にも男子が一夕の讀物としても吾人は如是の小説を大方に薦む

王政復古の主唱者亦忠孝節義の権化たる高山彦九郎が一代の事業、人格、勤王の眞面目は現代第一流の史傳小説家碧瑠璃園先生が獨特の妙筆に依りて活躍す、もし夫れ彼が最後の悲劇に至りては讀むもの必ず肉動き靈戰くの概あらん

皇后宮御歌土方伯爵謹書
宮中御歌所主事坂正臣先生題字
東京麟祥院什寶寫眞數葉入

○家庭讀本 春日局
碧瑠璃園著(紙數四百餘頁)
川村清雄畫伯裝幀(菊版特製美本)

碧瑠璃園著
川村清雄畫伯裝幀

○家庭讀本 大石陸女
紙數四百餘頁
菊版上製美本

小松原文部大臣閣下題字
樂翁著 齋藤畫伯裝幀

○偉人 水戸光圀
菊版特製全一冊

大町桂月先生序
原 茲朗先生著

○蒲生氏郷
四六判 全一冊

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

定價 壹圓
郵稅 二角
金稅 拾錢

春日局は千代田城大奥の創始者として又大奥政治の開發者也局が三代將軍の乳人として上りたる前後の事情は從來の小説傳記にも記されれど幼時の艱難稲葉佐渡守を良人とせる事情三人の實母としての局も上りたる事なし著者技に見る處ありて局の幼時中年時を詳記し延て晩年時及ぶ筆致圓熟事情明白家庭の讀物として最も趣味と教訓とに富むもの也

義士快擧の裏面史として見る可きものは本書あるのみ夫れ陸女は絶世の忠臣良雄の妻として夫以上の辛酸を嘗めて其事業を成就せしめし者著者燃犀なる眼は早く此點に着眼してよく烈婦が一代の事蹟を縦横に描寫す以て永く婦人の龜鑑とするに足る好小説なり

光圀卿は徳川時代有数の偉人にして勤王家也著者は馬琴の別號たる樂翁を自稱せる當代有数の文學家の匿名也其流麗なる詞藻と高雅なる對語との間に知らず識らず光圀卿の人格事蹟を了解せしめて千載の下尚此偉人を偲びて轉た欽慕の情に堪へざるものあり本書の特色は其高潔にして健全なる趣味の流露に存すれば家庭の讀物として勿論廣く社會青年男女の讀物として良く教訓と趣味とを感得せしむる事他に比なし

大町桂月氏序して曰く「才氣縱横逸氣奔放覺えず人をして氣昂り情熱せしむ」と著者が滿腔の磊塊蒲生氏郷なる一英雄を執へ來りて縱横論評文辭燦爛として痛快を極む偉人若くは偉人たらん者は必ず此書に啖嚙して其翻山倒海の手腕を伸ぶるを要す

大町桂月先生校訂解題

全四十五册
定價各册錢
郵稅各四錢

學 生 文 庫

袖珍特製
鉛來紙刷
携帶至便

既 刊 書 目

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
義經	先哲叢談	益軒十訓	日本外史	常山紀談	心學道話	太平記	源平盛衰記	西遊記	會我物語	勝曲全集	益軒十訓	日本外史	南朝史傳
全	全	中	中	上	全	壹	壹	上	全	上	上	上	全
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
西	彈學名著集	讀心學道話	日本外史	大岡政談	太閤記	狂言記	百人一首一夕話	西遊記	勝曲全集	源平盛衰記	益軒十訓	常山紀談	一休諸國物語
全	全	全	下	上	壹	全	全	下	中	貳	下	中	全
以下	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
下	太平	太平	太閤	太平	太閤	勝曲全集	太閤	源平盛衰記	太平	源平盛衰記	太閤	源平盛衰記	常山紀談
手	記	記	記	記	記	下	記	五	貳	四	貳	參	下
中	終	四	五	三	四	參	參	五	貳	四	貳	參	下

●周到卓拔なる批評的解題は各書の性質辨要價値を詳説す

目丁三町石本區橋本日本市京東

堂 誠 至 兌 發

四四七一京東番振

340

36

100

100

100

終

